322
311

# 謡曲狂言

国立国会図書館

始

エトU43
322-31

# 謠曲狂言

大正
10 12 8
内交

文學士　平林治德編

# はしがき

謠曲のうち極めて古い時代のものは單なる謠物として存在して居たとも想像せられますが、今現に行はれて居る内外二百番中のものは、最初から舞臺にかける事を豫期して書かれたと考へられます。卽ち仕草と曲節と詞章とより成る綜合藝術たる能の一部分として作られたものと思ひますので、單獨に謠曲だけを讀んだのでは十分にその妙味を味ひ得ない憾みがあります。それ故謠曲を一の文學として鑑賞する場合にも演劇に於ける脚本の如く取り扱つたならば興味を增しはしないだらうかとの考から、從來謠曲印刷の慣習を破つて、試に本書の如き形にして見ました。但し主とする所は無論本文にあるのですから、形囃子等の記述は極く大體に止めましたが、何分藝の方面には素人の編者が、諸流謠本の書込及解說、形附本、能の栞等の書を參考し、貧しい觀能の記憶を辿つて書いたのですから幾多批評の餘地もありませうし、僭越のそしりも甘受しなければなりませぬ。唯之が手引となつて、舞臺面を想像しつゝ讀む事に多少でも役立ち、講讀の興味を增す事が出來れば編者は滿足なのであります。能面の寫眞を口繪とし、登場人物の扮裝を註し、所々實演の寫眞を挿んだのも此目的からであります。狂言も右と同樣の見地で編纂したのでありますが、之は仕草も極めて簡單で、讀むだけで一通りの動きは想像せられますので尙更筆を省きました。とにかく之は一の試みとして作つて見たのですから、識者の高敎を得て、訂正して行き度いと存じます。

大正十年十一月

編者

# 凡例

一、本書は高等程度の諸學校の教科書として編纂したものであります。

一、謡曲二百番中より、作の佳なるもの、趣を異にしたもの十番を選び、之に狂言八番を添へ、二日の演能の如く組み合はせました。初日は高砂より安宅まで、二日目は部屋より山姥まで、面の寫眞を以て其の境と致しました。番組の組方もなるべく斯道のきまりに從ひましたが、採擇の都合上無理した點もあります。

一、謡曲の本文は現行觀世流謡本により、流儀によつての多少の相違は一々列擧せず、解釋上興味ある點ひと思つた所は所々傍記しておきました。狂言は大體狂言記により、讀み難い所は送假名を入れておきました。括弧内は編者の書加へたのが大部分であります。

一、「は詞と稱せられて居る部分、『(狂言「)は曲節を附けて謡ふ部分。

一、頭註は引歌引詩の明瞭なもののみに止め、古物語等を踏襲した字句に就いては一々註しませんでした。

一、形、囃子の記入は大抵現行觀世流によりましたが、精粗の度も各曲統一しませんでした。唯本文讀解の際多少の參考にもと思つて色々に書いて見たのです。



一、卷末附錄舞臺の圖は舞臺面演者の動きを知る上の參考にして頂くつもりです。

一、口繪及び挿入寫眞に就いては香藤香村氏の好意を感謝致します。

一、扉文字は畏友文學士沼澤龍雄氏の揮毫を煩はしました。此に御禮申します。

一、能を書くに、序破急をかくとて、筆ばかりにかくはわろきなり。風情の序破急をかくべし。……二きれにて入かはる能は書きやすきなり。其まゝする能は目には離れたる所をかくべし、是大事なり。それが無ければぬなりとしてわろし。松風村雨などゞ其まゝにて入かはりたる能なり、「うしともおもはぬ」云ひ捨てゝ、ひそとしてある所なり。かやうの所をよくよく伺ふべし。……唯こゝとばのにほひを知るべし。文章の法は言葉をつづめて理のあらはるゝを本とす。

世阿彌　申樂談儀



# 謠曲狂言目次


口繪(面)

高砂……一

末ひろがり……九

田村……一四

栗燒……二一

松風……二六

暇の袋……三五

砧……三六

宗論……四七

安宅……五二

謡曲狂言　目次

口絵（面）


邯鄲……六九
文相撲……七五
景清……八一
布施ない……九三
熊野……九八
梟山伏……一〇九
隅田川……一一
瓜盗人……一三
山姥……一三七


――終――

小尉（尉面、高砂の前シテ等）

童子（男面、田村の前シテ等）

疲女（女面、砧の前シテ等）

小面（女面、松風のシテ又はツレ等）

# 謠曲狂言

## 高砂

ワキ、阿蘇宮神主友成、大臣烏帽子、着附厚板、白大口、狩衣、ワキ、ワキツレ次第腰帶、扇。ワキツレ、從者、ワキに同じ、狩衣赤地。ワキ、そもそもそ次第の囃子にてワキ及ワキツレ（二人或は四人）出で、舞臺に入り、向合ひて謠ふ。

『今をはじめの旅衣、〳〵、日もゆくすゑぞ久しき。
そも是は九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。
われいまだ都を見ず候ふほどに、此度おもひたち都に上り候。又よきついでなれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候。」

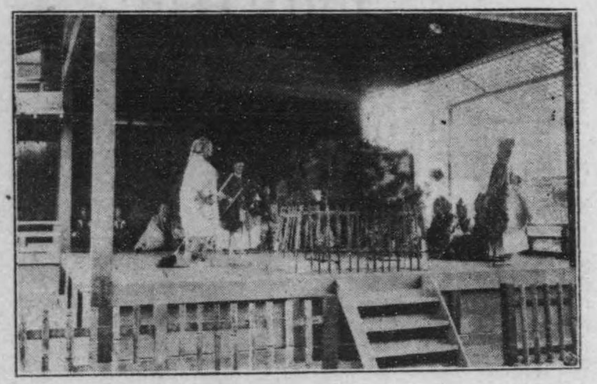
シテ、老翁、面小尉、鬘髮、着附小格子、白大口、水衣、腰帶、扇。ツレ、嫗、面姥、髮、姥髮、髮帶、着附箔、色無厚板着流、寄水衣。

遊行『旅衣、末はるばるの都路を、〳〵、けふ思ひ立つ浦の波、舟路のどけき春風も、幾日來ぬらん跡末も、いさ白雲のはるばると、さしも思ひし播磨潟、高砂の浦に着きにけり。〳〵。

ワキは脇柱のもと、ワキツレは其右に竝び着座。眞の一聲の囃子となりシテはサラヒをツレは杉幕をかたげて出で來たり橋掛に向合ひて

高砂

*たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔のともならなくに
（古今十七雜、藤原興風）



シテ、ツレ『高砂の、松の春風吹き暮れて、尾上の鐘もひびくなり。ツレ『波は霞の磯がくれ、音こそしほの滿干なれ。

サラヒ下ろし引ずり舞臺に入り、シテは仕手柱先に、ツレは眞中に立ちて

シテ『たれをかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎ來し世々はしら雪の、つもり積りて老の鶴の、ねぐらに殘る有明の、春の霜夜の起き居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅莚の、思ひを述ぶるばかりなり。下歌『おとづれは松にこと問ふ浦風の、おち葉衣の袖そへて、木蔭の塵を掻かうよ。〳〵。上歌『所は高砂の、〳〵、尾上の松もとしふりて、老の波もよりくるや、木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて、猶いつまでか生の松、それも久しき名所かな。〳〵。

シテは眞中にツレは右正面先に足とまるを待ちて、ワキ、シテに向ひ

ワキ「里人を相待つところに、老人夫婦きたれり。いかに是なる老人に尋ね申すべき事の候。」

シテ「こなたの事にて候ふか何事にて候ふぞ。」

ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ。」

シテ「唯今木蔭を清め候ふこそ高砂の松にて候へ。」

ワキ「高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國をへだてたるに、何とて相生の松とは申し候ふぞ。」

シテ「仰せの如く古今の序に、*高砂住の江の松も、相生のやうに覺えとあり、さりながら、此尉は津の國住吉のもの、是なる姥こそ當所の人なれ、知る事あらば申させ給へ。」

ワキ『ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國をへだてゝ住むと、いふはいかなる事やらん。

*（前略）よろこび身に過ぎたのしみ心に餘り、富士の煙によそへて人を戀ひ、松蔭の昔に友を忍び、高砂住の江の松も相生のやうに覺え、男山の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞなぐさめける。（後略）
（古今和歌集序）

ツレ『うたての仰せ候ふや、山川萬里を隔つれども、たがひに通ふ心づかひの、妹脊の道は遠からず。シテ『まづ案じても御覽ぜよ。シテ、ツレ『高砂住の江の、松は非情のものだにも、相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともに此年まで、相生の夫婦となるものを。

ワキ『いはれを聞けばおもしろや。さて〳〵さきに聞えつる、相生の松の物語を、所に言ひおく謂れはなきか。

シテ『昔の人の申しゝは、是はめでたき世のためしなり。」ツレ『高砂といふは上代の、萬葉集の古の義、シテ『住吉と申すは、いま此御代に住み給ふ延喜の御事、」ツレ『松とは盡ぬ言の葉の、シテ『榮えは古今相同じと、シテ、ツレ『御代をあがむる喩なり。

ワキ『よくよく聞けばありがたや、今こそ不審はるの日の、シテ『光和らぐ西の海の、ワキ『かしこは住の江、シテ『こゝは高砂、ワキ『松も色そひ、シテ『春も、ワキ『のどかに、地『四海波靜かにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ

(一)西の海やあをきが原の汐およりあらはれ出でし住吉の神（續古今、釋教、卜部兼直）

(二)ツレ、シテの後を廻り地の前に行きて座す。シテ、謠に合せて色々形あり。

(三)太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊（王充論衡）

御代なれや、逢ひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、言もおろかや斯かる世に、住める民とてゆたかなる、君のめぐみぞありがたき。〳〵。

ワキ「なほ〳〵高砂の松のめでたきいはれ、くはしくおんものがたり候へ。」

シテ、眞中に座し、サラヒを置き、腰の扇を拔き持つ。

地『それ草木こゝろなしとは申せども、花實の時をたがへず、陽春の德をそなへて、(一)南枝花はじめて開く。シテ『しかれども此松は、そのけしき長へにして、花葉時を分かず、地『四つの時いたりても、(二)一千年の色雪の內に深く、又は松(三)花の色十かへりとも云へり。シテ『かゝるたよりを松が枝の、地『言の葉草の露の玉、心をみがく種となりて、シテ『(四)生きとし生けるもの毎に、地『敷島の陰によるとかや。

(ルクセ)『しかるに長能(五)が言葉にも、有情非情のその聲、みな歌にもるゝ事なし。草木土砂風聲水音まで、萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き、

(一)詠言春色從東到　霽嶺南枝花始開（御詠集、春、尋春花　菅原文時）

(二)十八公榮霜後露　一千年色雪中深（御詠集、雜、松、歳寒知松貞、源順）

(三)榕葉之影再改、尊顏南面、松花之色十廻、豈唯天意乎（本朝文粹、大江朝綱）

(四)（前略）花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの何れか歌をよまざりける。」（後略）（古今和歌集序）

(五)和歌は是五行の體也詞に出すを歌とし心にしれるを體とす、春の林の東風に動きも皆和歌の體にもれず、有情非情共に歌の道をばおこす也云云（長能私記）

秋の蟲の北露に鳴くも、みな和歌の姿ならずや。中にも此松は、萬木にすぐれて、十八公のよそほひ、千秋の緑を爲して、古今の色を見す。始皇の御爵に、あづかるほどの木なりとて、異國にも本朝にも、萬民これを賞翫す。

シテ『高砂の、(一)尾上の鐘の音すなり。地『曉(二)かけて、霜はおけども松が枝の、葉色は同じ深みどり、立ちよる陰の朝夕、にかけども落葉の盡きせぬは、まことなり松(三)の葉の、散りうせずして色はなほ、正木のかづら長き世の、たとへなりける常磐木の、中にも名は高砂の、末代のためしにも、相生の松ぞめでたき。

ロンギ地『げに名を得たる松が枝の、〳〵、老木の昔あらはして、その名を名

(一)高砂の尾上の鐘の音すなりあかつきかけて鶴やおくらむ（千載、冬、前中納言匡房）
(二)曉を眺にさしサラヒを持ち立上り
(三)（上略）「青樹の緑絶えず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しく止まれらば」（後略）（古今序）

のり給へや。

シテ、ツレ『今は何をかつゝむべき、是は高砂住の江の、相生の松の精、夫婦と現じ來りたり。

地『ふしぎやさては名どころの、松の奇特をあらはして、シテ、ツレ『草木こゝろなけれども、地『かしこき世とて、シテ、ツレ『草も木も、地『わが大君の國なれば、いつまでも君が代に、住吉にまづ行きて、あれにて待ち申さんと、ゆふ波の汀なる、海人の小舟に打ち乘りて、追風にまかせつゝ、沖の方に出でにけりや、沖の方にいでにけり。

中入。間狂言（當浦の者 ワキの呼出しにより舞臺に坐し、高砂の松のめでたき仔細、高砂住の江の松を相生といふこと、松のめでたきことを述ぶ。ワキ、先程老人夫婦來り、今の物語をなし、小舟になり沖の方に出でたる由をいふ。間、是は奇特の事なり、さては當社と住吉の明神とが櫂りに現はれ給ひたると推量申せば、早々住吉に參詣あれかし、某樽取となりて御供申さんとて引く。ワキ、ワキツレ立ならびて、待謠を謠ふ。

ワキ、ツレ『高砂や、此浦舟に帆をあげて、〳〵、月もろともに出でしほの、波の淡路の島陰や、遠く鳴尾の沖すぎて、はや住の江に着きにけり。〳〵。

後シテ　住吉明神、面部鄙男、黒乗、鉢巻、透冠、着附厚板、大口、狩衣、腰帯、扇。

待謡留より出端となり、後シテ出て橋掛にて開き謡ふ。

後シテ『(一)われ見ても久しくなりぬ住吉の、岸の姫松いくよ經ぬらん。睦ましと君は知らずや瑞籬の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すゞしめ給へ宮つこたち、地『西(二)の海、あをきが原の波間より、シテ『あらはれ出でし神松の、春なれや、殘の雪の朝香潟、地『玉藻刈るなる岸陰の、シテ『松根(三)によつて腰をすれば、地『千年の緑手に滿てり、シテ『梅花を折つて頭にさせば、地『二月の雪ころもに落つ。

(一)むかし帝、住吉に行幸したまひけり。我見てもひさしくたりぬ住吉のきしのひめ松いく代へぬらん　御神現形したまひてむつましと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき（伊勢物語）

(二)西の海やあをきが原の汐ぢよりあらはれ出でし住吉の神（西頁出）

(三)前略　倚松想而摩腰、千年之翠滿手。折梅花而挿首、二月之雪、落衣、斯盡吾朝之風俗、子日之嘉會也（本朝文粹十一、春日野遊和歌序、謡在列）

神舞

ロンギ地『ありがたの影向や、〳〵、月すみよしの神遊、御影を拜むあらたさよ。シテ『げにさま〴〵の舞姫の、聲もすむなり住の江の、松影もうつるなる、青海波とはこれやらん。地『神と君との道すぐに、都の春にゆくべくは、シテ『それぞ還城樂の舞、地『さて萬歳の、シテ『小忌衣、地『さすかひな歳樂にはいのちを延ぶ。相生の松風、颯々の聲ぞたのしむ、〳〵。

拍子踏みて留め、シテ扇をたゝみて引く。次いでワキ、囃子方の順序に樂屋に入る。

## 末ひろがり

大名、シテ　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀　冠者、アト　半袴

大名「罷り出でたるは隱れもない大名。太郎冠者あるか。冠者「御前に。大名「念なう早かつた。汝を喚び出すは別なる事でない。明日は何れもを申し入れうと思ふが何とあらうぞ。冠者「誠に内々は御意なうても、申し上げうと存ずる處に、一段でござりませう。大名「よからうな。冠者「はつ。大名「さうあれば、引出物には何をか出さうな。冠者「されば、何が好うござりませうぞ。大名「やい、思ひ付けた。下からは、上が計らはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。冠者「ようござりませう。大名「汝は大義ながら、上方へ上り、急いで求めて參れ。冠者「畏つてござる。大名「急げ。冠者　はつ。（大名くつろぐ）謡白　扨も〳〵某が賴うだる者は、立板に水を流すやうに物をいひつけられまする。まづ急いで參らう。とかう申すうちに、都さうにござりまする。やれ扨失念の致した。末廣屋を存ぜぬが、何と致さうぞ。えい、欲しいものは呼ばはるていに見え

てござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう〳〵。

すり「罷り出でたるは、洛中に住居する心も直にない者でござる。何者やら、どんどと申す程に、さわたつて見ませうず。なう〳〵、其方は何をわつぱとおしやるぞ。冠者「その事でござる。田舍者でござれば、末廣屋を存ぜぬによつて、か樣に申す事でござる。すり「なう其方は、末廣と云ふものをお見知りやつたか。冠者「なう都人とも見えぬ。知つたればこれを買はうといふ。すり「なうなう、誤りました。某は末廣屋の亭主でおりやるによつて、懇に問うてをりやる。冠者「はて仕合な事でござる。して末廣の出來合はござるか。すり「なか〳〵ござる。冠者「急いで見せさつしやれ。すり「心得てござる。それに待たつしやれ。冠者「は。獨白「やれ扨、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。思ひ付けてござる。これに傘がござるほどに、之れを持てて賣りませう。

（後見座より傘を持出で、冠者に向ひ）　なう〳〵田舍人、それにござるか。これ〳〵。冠者「や、はこれが末廣でござるか。すり「なか〳〵。冠者「どれ見せさつしやれ。すり「これ、ごろんぢやれ。（傘をひろげて見す）　冠者「はあ、まことに廣けさつしやれたれば、はていかい末廣でござる。さりながら、賴うだ人が注文のおこされてござるほどに、これに合うたらば買ひませう。すり「さらば讀まつしやれい。冠者「先づ地紙好くとしてござる。すり「これ〳〵、地紙好くとは、この紙の事でおりやる。師走狐の如く、こん〳〵といふほど張つてござる。冠者「骨磨とござる。すり「これ〳〵、骨磨とはこの骨の事、信濃木賊をかけて磨いたによつて滑々致す。冠者「要元締めてとござる。すり「かなめ元締めてとは、斯う廣けて、この金でもつてじつと締めるによつて、此處の事でござろ。冠者「繪は、戲繪としてござる。すり「ふん、これ田舍人、これへ寄らつしやれい、えい。（傘を取直し、柄にて打つまねしてざるる）冠者「なう〳〵、其方は田舍人ぢやと思うて、打擲めさるか。すり「いや打擲ではおぢやらぬ。こなたと某と、かうして戲れるを以て、則ち戲繪といひまする。冠者「扨も〳〵、注文に合うて嬉しうござる。して價は如何程でござるぞ。すり「高直におぢやる。冠者「幾らほどでござるぞ。すり「萬疋でをりやる。冠者「是又高いことでござる。ちつとねぎりませう。すり「おう、すこしなどはぬいてやりませう。冠者「百ばかりになりますまいか。すり「なう其處な人、その樣な下直な物ではない。ようお買やるまいぞ。冠者「申し〳〵、何と聞かつしやれたぞ。萬疋の内をば、百ばかりもぬいて下されまいかと云ふ事でござる。すり「はあ、聞分けました。五百ぬいて進じよう。冠者「忝うこそござれ。すり「して代物は、何處で渡さつしやれまする。冠者「三條の布袋屋で渡しませう。すり「これで受取りませう。冠者「忝うござる。さらば〳〵。すり「なう〳〵。冠者「何でかござるぞ。すり「其方は定めし主持でござろ。冠者「なか〳〵。すり「人の主は機嫌の善い事もあり、又惡しい事もある。若し自然とも、機嫌の惡しうおぢやろさうば、斯うおしやつたがようおぢやろ。（冠者の耳に口をよせ囁手物を教ふ）冠者「扨も〳〵忝うこそござれ。すり「ようおりやつた。冠者「獨白「やれ扨、まづ賴うだ者に、急いで御目にかけうず。（一廻りし橋掛より）殿樣ござりまするか。大名「太郎冠者、戻つたか。冠者「歸りました。大名「やら大儀や、急いで見せい。冠者「はつ。大名「こりや何ぢや。冠者「末廣

でござりまする。大名「これがや。冠者「はあ、殿様のお合點が參らぬこそ道理でござりまする。かう致しまするとき、つう廣がりまする。大名「ふん、まことにこれはいかい末廣ちやわいやい。しておのれは注文に合はして來たか。冠者「なか〳〵、あはせましてござる。それで讀まつしやれませい。大名「急いで合せ居ろ。まづ地紙好しと。冠者「はあ、それこそ念を遣ひましたれ。この紙の事でござる。師走狐の如く、こんこんといふほどはつてござりまする。大名「して又、骨磨は。冠者「はつ、この骨の事でござる。信濃木賊をかけて磨いてござるによつて、滑々致しまする。

大名「要元締めては。冠者「かう廣げまして、この金で締めるをもつて、これが要元締めてと云ふ所でござる。大名「絵は、戯絵は。冠者「それこそ念のつかひましたれ。それに待たつしやれませい。（前の如く打つまれして）や、覺えたか。大名「や、これは何をし居るぞ。冠者「いや申し、この柄でかうして戯れるをもつてざれえと申しまする。大名「やい其處な奴、しておのれは知らぬが定か。冠者「は、いや存じませぬ。大名「知らずばこれへ寄り居ろ。末廣とは扇の事、これはおのれ古傘を買うてうせ居り、いや末廣で候の、戯絵で候の、某が前へは叶ふまい。退り居ろ。やれさて憎いやつかな。冠者「まことに頼うだ人の云はるれば、これはさし傘ぢやけなものを。ひよんな事をいたした。さりながら、都の者も皆まではぬきませなんだ。機嫌直しを致へてくれた。まづ急いで申して見ませうず。はやし「いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、おれもかささゝうよ。けにもさあり。やよ、けにもさうよの。いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これも神のちかひと、人がかさをさすなら、おれもかささゝうよ。けにもさあり。やよ、けにもさうよの。やよ、けにもさうよの。」大名「イロ いかにやゝ〳〵太郎冠者、買物にぬかれて囃物をするとも、ぜんだいの曲者、身が前へは叶ふまい。（冠者の囃子により知らず〳〵浮かれ出して）「けにもさあり。やよ、けにもさうよの。やよ、けにもさうよの。」イロ買物にはぬかれたが、まづ此方へこけ入つて、鰻の鮨をばえいやつと頼張つて、ようか酒を飲めかし。はやし「けにもさあり。やよ、けにもさうよの。「何かの事はいるまい。」人がかさをさゝうなら、おれにもかさきせやれ。ひやろ！〳〵。ほつはいひやろひい。

# 田村

ワキ　旅僧、角帽子、裏斗目、水衣、腰帯、數珠、扇。

シテ　宮つこ、面童子、黒頭、蓑附鎧笄、水衣、腰帯、扇、薙帯。

次第にてワキ出で、舞臺常座にて

ワキ次第『鄙の都路へだてきて、〳〵、九重の春に急がん。

ワキ「是は東國方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふほどに此春おもひたち候。」

道行『頃もはや、彌生なかばの春の空、〳〵、影ものどかにめぐる日の、霞むそなたや音羽山、たきの響もしづかなる、清水寺に着きにけり。〳〵。

ワキ「急ぎ候ふほどに、是は都清水寺とかや申すげに候。是なる櫻の盛とみえて候。人を待ちてくはしく尋ねばやとおもひ候。」

脇座に行き、囃子一聲、シテ萩箒をさげ、舞臺に入り

シテ『おのづから、*春の手向となりにけり、地主權現の花ざかり。それ花の名どころおほしといへども、大悲のひかり色そふ故か、この寺の地主の櫻に若くはなし。さればにや大慈大悲の春の花、十悪の里にかうばしく、三十三身の秋の月、五濁の水にかげきよし。下歌『千早振神の御庭の雪なれや、*上歌『しろたへに雲も霞もうづもれて、〳〵、いづれ櫻の梢ぞと見わたせば八重ひとへ、げに九重の春の空、四方の山なみおのづから、時ぞと見ゆる氣色かな。〳〵。

*けふみれば雲も櫻もうづもれて霞かねたるみよし野の山（新勅撰、春、藤原家隆）

*暮れて行く春の手向やこれならむけふこそ花は幣と散けれ（新後撰、春、後鳥羽院）

ワキ「いかに是なる人に尋ね申すべきことの候。」

シテ「こなたの事にて候ふか、何事にて候ふぞ。」

ワキ「見申せばうつくしき玉箒をもち、木蔭を清め給ひ候ふは、若し花守にて御入り候ふか。」

シテ「さん候ふ是はこの地主權現に仕へ申す者なり。いつも花の頃は木蔭を清め候ふほどに、花守とや申さん、又宮つことや申すべき。いづれによしある者と御らん候へ。」

ワキ「げに〳〵よしありげに見えて候。先々當寺の御來歴、くはしく語り給ふべし。」

シテ「そも〳〵當寺清水寺と申すは、大同二年の御草創、坂上の田村丸の

御願なり。昔大和の國子島寺といふ所に、げんしんといへる沙門、正身の觀世音を拜まんと誓ひしに、ある時こつがはの川上より、金色の光さしゝを、尋ね上つて見れば一人の老翁あり。かの翁語つていはく、我は是れ行叡居士といへり。汝一人の檀那をまち、大伽藍を建立すべしとて、東をさして飛び去りぬ。されば行叡居士といつぱ、これ觀音薩埵の御再誕、『又檀那を待てとありしは、是れ坂の上の田村丸、地『今も其名に流れたる清水の、〳〵、深き誓ひも數々に、千手の御手のとりどりさまざまの誓ひあまねくて、國土萬民を漏らさじの、大悲の影ぞありがたき。げにや安樂世界より、今この娑婆に示現して、我らが爲の觀世音、仰ぐもおろかなるべしや。〳〵。

シテ帶すて扇持つ。以下ワキに名所を教へ、共に風光を賞する心の形あり。

ワキ「近頃おもしろき人にまゐりあひて候ふ。また見え渡りたるは皆名所にてぞ候ふらん、御教へ候へ。」

シテ「さん候ふ皆名所にて候。御尋ね候へ、教へ申し候ふべし。」

ワキ「まづ南に當つて塔婆の見えて候ふは、いかなる所にて候ふぞ。」

シテ「あれこそ歌の中山清閑寺、今熊野まで見えて候へ。」

ワキ「また北にあたつて入相の聞え候ふは、いかなる御寺にて候ふぞ。」

シテ「あれは上見ぬ鷲の尾の寺、や、御覽候へ、音羽の山の嶺よりも、出でたる月のかゞやきて、この地主の櫻にうつる景色、まづ〳〵これこそ御覽じごとなれ。」

ワキ『げに〳〵是こそいとま惜しけれ。こと心なき春の一時、シテ『げに惜しむべし、ワキ『惜しむべしや。シテ、ワキ『春宵一刻價千金、花に清香月に陰、シテ『げに千金にもかへじとは、いま此時かや。地『あら〳〵面白の、地主の花の景色やな。櫻の木のまに漏る月の、雪もふる夜嵐の、さそふ花とつれて、ちるや心なるらん。

(舞クセ)

クセ『さぞな名にしおふ、花の都の春の空、げに時めける粧ひ、青楊の陰みどりにて、風のどかなる、音羽の瀧の白絲の、くりかへしかへしても、面白やありがたやな。地主權現の、花の色も異なり。シテ『たゞ賴め、標茅が

(一)春宵一刻直千金
花有清香月有陰
歌管樓臺聲細細
秋千院落夜沈沈
(春夜、蘇東坡)

(二)なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむ限は
此歌は清水觀音の御歌とたむいひ傳へたる(新古今、釋教歌)

原のさしも草、地『われ世の中に、あらんかぎりはの御誓願、にごらじ物を清水の、緑もさすや青柳の、げにも枯れたる木なりとも、花櫻木の粧ひ、いづくの春もおしなべて、のどけき陰は有明の、天も花に醉へりや、面白の春べや、あら面白の春べや。

ロンギ地『げにやけしきを見るからに、たゞ人ならぬよそほひの、その名いかなる人やらん。シテ『いかにとも、いさやその名も白雪の、跡を惜しまば此寺に、歸る方を御覽ぜよ。地『歸るやいづく蘆垣の、間ぢかきほどか遠近の、シテ『たづきも知らぬ山中に、地『おぼつかなくも思ひ給はゞ、わが行く方を見よやとて、地主權現の御前より、下るかと見えしが、くだりはせで坂の上の、田村堂の軒もるや、月の村戸を押しあけて、内に入らせ給ひけり、内陣に入らせ給ひけり。

中入、アヒ（清水寺門前の者）地主の花を眺めに來り、ワキを見つけ、その所望によりて當寺建立の來歴を物語る。アヒ下がりて待謡

ワキ『夜もすがら、ちるや櫻の陰に居て、〳〵、花も妙なる法の場、迷はぬ月

(一) をちこちのたづきも知らぬ山中に靈束たくも呼子鳥かな（古今、春、讀人不知）
(二) シテ　鑑掛に行く
(三) 扇にて扉を開く心



の夜と共に、此御經を讀誦する。〳〵。

一聲、後シテ法被の右肩脱ぎ、太刀を佩きて出づ、鬼神退治の扮裝で舞臺に入り

後シテ『あら有難の御經やな。清水寺の瀧つ波、まこと一河の流れを汲んで、他生の縁ある旅人に、言葉をかはす夜聲の讀誦、これぞすなはち大慈大悲の、觀音擁護の結縁たり。

ワキ『ふしぎやな花の光にかゞやきて、男體の人の見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。

シテ『今は何をかつゝむべき、人皇五十一代、平城天皇の御宇に有りし、坂の上の田村丸、(一)東夷を平げ惡魔をしづめ、天下泰平の忠勤たりしも、すなはち當寺の佛力なり。地『しかるに君の宣旨には、勢州鈴鹿の惡魔をしづめ、都鄙安全になすべしとの、仰せによつて軍兵をとゝのへ、すでに趣く時節に至りて、此觀音の佛前に參り、祈念をいたし立願せしに、

シテ『不思議の瑞驗あらたなれば、地『歡喜微笑の賴を含んで、急ぎ凶徒に打ち立ちけり。クセ『(二)普天の下卒土の内、いづく王地にあらざるや。やが

後シテ　坂上田村麿面平太、黑乘、製子打烏帽子、白鉢卷、着附厚板、半切、法被、腰帶、太刀、扇。

(一) 舞臺の中央に行き床几にかかる

(二) 溥天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣、大夫不均、我從事獨賢。（詩經、小雅北山孟子萬章に之を引き普天とせり）

て名にしおふ、關の戸さゝで逢坂の、山を越ゆれば浦波の、粟津の森やかげろふの、石山寺を伏し拜み、是も清水の一佛と、賴みはあひに近江路や、勢田の長橋ふみならし、駒も足なみや勇むらん。シテ『すでに伊勢路の山ちかく、地『弓馬の道もさきかけんと、勝つ色みせたる梅が枝の、花も色めきて、たけき心はあらがねの、土も木も、わが大君の神國に、もとより觀音の御誓ひ、佛力といひ神力も、猶かずかずに大丈夫が、待つとは知らでさを鹿の、鈴鹿の御禊せし世々までも、思へば嘉例なるべし。

地『さるほどに山河を動かす鬼神の聲、天にひゞき地に滿ちて、萬木青山動搖せり。

カケリ（合戰の趣）

シテ『いかに鬼神もたしかに聞け、昔もさるためしあり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も、王位を背く天罰にて、千方を捨つれば忽ち亡び失せしぞかし。ましてや間近き鈴鹿山、地『ふりさけ見れば伊勢の海、〳〵、阿濃の松原むらだち來つて、鬼神は、黑雲鐵火をふらしつゝ、數千騎に身を變じて、山の如くに見えたる所に、シテ『あれを見よ不思議やな。地『あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の、光をはなつて虛空に飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には智惠の矢をはめて、一度はなせば千の矢先、雨霰とふりかゝつて、鬼神の上に亂れおつれば、ことごとく矢先にかゝつて、鬼神は殘らず討たれにけり。ありがたし〳〵や、誠に*呪詛諸毒藥念彼、觀音の力をあはせて、すなはち還着於本人、すなはち還着於本人の、かたきは亡びにけり。これ觀音の佛力なり。

*上略　天智天皇の御宇に、藤原千方といふ者あつて、金鬼、風鬼、水鬼、陰形鬼といふ四つの鬼を使へり。金鬼は其身堅固にして、矢を射るに立たず。風鬼は大風を吹かせて、敵城を吹破る。水鬼は洪水を流して、敵を陸地に溺らす。陰形鬼は其形を隱して、俄に敵を拉く。斯くの如くの神變、凡夫の智力を以て防ぐ可きに非ざれば、伊賀伊勢の兩國、是が爲に防げられて、王化に從ふ者なし。爰に紀朝雄といひける者、宣旨を蒙つて彼國に下り、一首の歌を讀みて、鬼の中へぞ送りける。「草も木も我大君の國なれば、いづくか鬼の栖なるべき。」四つの鬼此歌を見てさては我等惡逆無道の臣に隨つて、善政有德の君を背き奉りける事、天罰逃るる處なかりけりとて、忽に四方へ去つて失せにければ、千方勢を失うて、聽て朝雄に討たれにけり。（太平記、卷十六、日本朝敵の事）

*呪詛諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還著於本人（法華經普門品）

## 栗焼

主人「此あたりに住居致す者でござる。さる方から見事な栗を貰つてござる。夫に付いて太郎冠者を呼び出し、談合致す事がある。太郎冠者あるかやい。冠者「御前に。主人「汝を呼び出だすは別

の事でもない。ちと汝にさゝする者がある程に、夫に待て。冠者「畏つてござる。主人「やい〳〵太郎冠者。此重の内な物をさる方から貰うた。さいて見よ。冠者「先づお重の内でござる程に、お菓子でござりませぬか。主人「いや〳〵夫でもない。冠者「夫ならばつるし柿でござりませぬか」主人「いや〳〵夫でもない。栗ぢや。冠者「栗でござるか。主人「中々。冠者「是は見事な栗でござる。主人「されば此やうな見事な栗はない。夫に付き不思議な事がある。人に物をくれられうならば、或は三十か五十下されう所を、四十下されたが、合點のゆかぬ事ぢや。冠者「夫は物でござらう。定めて等閑なうなさるゝお方から貰はせられたものでござらう。主人「中々。冠者「夫ならば始終末代までも仰せ合されうとのお事でござりませう。主人「是は汝がいふ通りぢや。扨此栗に付いて何れもを申し入れうと思ふが何とあらうぞ。冠者「是はようござりませう。主人「さりながら客は七八人もあらう栗は四十ならではないが、何として進じたものであらうぞ。冠者「是は何とぞ致し樣がござりませう。主人「汝分別をして見よ。冠者「物といたしませう。先づ皮を去りまして摺鉢へ入れて摺り碎きまして、扨よい程に丸うして遣はせられたらば、七八十人へも出だされませう。主人「是は尤ぢやが、夫では栗の大きい詮がない。冠者「誠に左樣でござる。夫ならば先づ是を燒栗に致いて、私の持つて出まして、上座にござる御方へずらりと進じませうず。又末座にござる御方は皆御若衆で御心安うござる程に、餘のお菓子なりとも進ぜられたがようござる。主人「是は汝がいふ通りぢや。そちに云ひ付くる程に急いで燒栗にしてこい。冠者「畏つてござる。主人「えい。冠者「はあ。（扇より太郎冠者の扇へあけ栗を渡す主人。入る）。冠者獨白「扨も〳〵此樣な見事な栗をついに見た事がござらぬ。扨どこもとに持つていて燒かうぞ。お次へ持つて參らうか。いや〳〵お次へ持つていたらば、若子樣の出でさせられて、あそこへもくれい、爰へもくれいと仰せられうず。遣はせずば御機嫌がわるからう。又數の定まつた物ぢやに依つて進ずる事は成るまい。たゞお臺所へいつて燒かう。（と言うて小廻り）誠にいか樣の栗も見たが、此のやうな大きな栗を見た事がない。又あれば有る物でござる。いま是によい火がおこつてある。誰も此火はいらぬか。えい、幸の事ぢや。栗を燒けと云はぬばかりの火ぢや。さらば燒かう。扨も扨も見事な栗でござる。（一つ二つ燒きかけて）ボンボ（と言うて飛び退く）誠に栗を燒くには芽を取つて燒けと云ふ事をはつたと忘れて、ぴつくりとした。（芽を取つて燒く）最前から箇樣に致せばよいものを、はつたと忘れてよい肝をつぶいた。（五つ六つくべて扇にてあふぎ）おゝ、燒くるく〳〵。火がよい所ではや燒けた。最早是はよいは。是もよい。是は悉くよいは。（扇にて取り出だし兩手灰を吹き落し）是は燒けたれば一入見事な栗ぢや。（殘らず栗を扇に載せ）まんまと燒いた。急いで持つて參つてお目にかけよう。いか樣此樣な見事な栗はござるまい。定めて風味もよからう。夫に付きて思ひ出した事が有る。お座敷へは某が持つて出るであらう。太郎冠者是は見事な栗ぢやが、風味は何とあるぞと問はせられた時に、何とござるも存ぜぬゝ申すは不調法にあらう。というて數の定まつた物ぢやに依つて、食うて見る事は成るまい。たゞ持つて參らう

か。某の不調法は苦しうないが、頼うだ人の外聞がわるい。いや〳〵頼うだ人の外聞にはかへられぬ。一つ食うて見よう。（一つ食うて）扨も〳〵うまい事かな。此樣な栗を食うた事はない。今一つ食ひたいが。いま是にこけたがある。是をたべう。（食うて小廻り）いま一つ食うて叱らるゝも、二つ食うて、叱らるゝも叱らるゝ、所は同じ事ぢや、たゞもの食へ。（と言うて食ひながら廻りて皆食ふ。扇をたゝき）やあ〳〵こりや皆食うた。頼うだ人のたゞの事ではあるまい。いやいや頼うだ人は正直な人ぢや程に、面白をかしう申しなさう。申しござりまするか〳〵。

主人「太郎冠者何と栗は燒いたか。冠者「まんまと栗燒致してござる。主人「でかいた〳〵。早う見せい。冠者「先づ私の才覺を聞かせられい。お次へ持つて參つて燒かうと存じて御座るが、お次へ參つたらば定めて若子樣方の出でさせられて、爰へもくれいかしこへもくれいと仰せられませうず。進ぜずば御機嫌がわるうござらう。又數の定まつた物でござるに依つて、進ずる事は成りませぬ。所でお臺所へ持つて參つてござれば、幸ひ火がくわつ〳〵とたつてござつた。所でまんまと燒栗に致いて、是へ持つて參りますれば、後から太郎冠者々々々々と呼ばせらるるに依つて後をきつと見てあれば。謠「毛雪頭に頂き、鬢髮に黑き髮もなし。老人と老女と、夫婦來り給ひて、我はこれ釜の神、三十四人の父母なり。汝栗をくれいよ。汝栗をくれずば、ほしい物をとらすまじ。栗をくれたらば、富貴にまもらんと。事委しくも宣へば、あら尊やと思ひて、夫婦に栗を奉る。」釜の神の出でさせられてござる。主人「夫はめでたい事ぢや。冠者「其後から三十四人の公達の出でさせられて、爰へもくれいかしこへもくれいと仰せらるゝ。所で悉く進じてござる。主人「夫婦へ進じたらば公達に進ずるに及ぶまい物を。冠者「何が思うても見させられい。三十四人の公達の、花を飾つて出でさせられ、楓のやうな手を出だいて、爰へ戻ればかしこへもくれいと仰せらるゝものが、何と進ぜずに置かるゝものでござるぞ。主人「遣はした事なれば是非に及ばぬ、殘つた栗をおこせ。冠者「もござりませぬ。主人「もない。冠者「中々。主人「先づ三十四人の公達へ三十四、夫婦へ二つ、まだ四つある筈ぢや。冠者「夫は此方の御算用がわるうござる。先づ三十四人の公達へ三十七八、夫婦に二つ、もござりませぬ。主人「やい總じて算用といふ物は恥かしいものぢや。三十四人の公達へ三十四、夫婦へ二つ。まだ四つある筈ぢや。冠者「其内に蟲の食うたが一つござつた。主人「多い内ぢや程に蟲の食うたもあらう。夫ならば殘つた三つの栗をおこせ。冠者「扨はこなたは栗燒の言葉を御存じござらぬか。主人「いゝや知らぬ。冠者「いうて聞かせませう。謠「栗燒く言葉には、〳〵。逃栗追栗灰紛とて三つは失せて候はず。お主殿の御心中、お恥かしう候ふ。主人「何でもない事、すさりをれ。冠者「はあ。主人「えい。冠者「はあ。

# 松風

ワキ　旅僧、角帽子、鬘斗目、水衣、數珠、扇。

狂言　所の者、長袴上下、少刀、扇。

雛子方座に着きて、毫に松をつけたる作物を正面先に出だす。ワキ出で舞臺に入り名宣る

ワキ「是は諸國一見の僧にて候。我いまだ西國を見ず候ふ程に、此度思ひ立ち西國行脚と心ざして候。

急ぎ候程に、是ははや津の國須磨の浦とかや申し候。又是なる磯邊を見れば、樣ありげなる松の候。如何さま謂のなき事は候ふまじ、此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。」

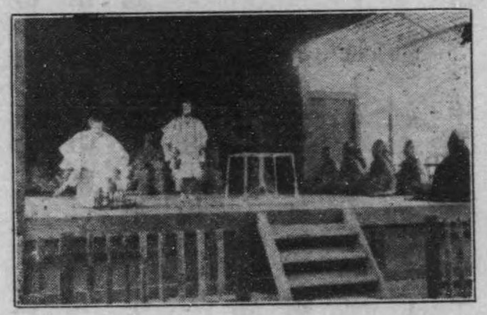
狂言を呼出だし、いはれを問ふ。狂言、松風村雨の事を物語り「御僧も逆縁ながら弔うて御通り候へ」と述べ、ワキ「さあらば立ち越え弔うて通らうずるにて候」狂言下がり、ワキは作物の前に行き謡ふ

ワキ『さては此松は、いにしへ松風村雨とて、二人の海人の舊跡かや。痛はしや其身は土中に埋もれぬれども、名は殘る世のしるしとて、變らぬ色の松一木、綠の秋を殘す事のあはれさよ。

ワキ「かやう に經念佛して弔ひ候へば、實に秋の日のならひとて 程なう暮れて候。あの山本の里までは 程遠く候ふ程に、是なる 海人の鹽屋に立ち寄り、一夜を明かさばやと思ひ候。」

脇座に坐す。後見汐汲車の作物を幕より持ち出で目付柱の方に出す。眞の一聲にてシテは扇を持ち、ツレは水桶を提げ、何れも水衣の肩を上げて出で、橋掛にて謡ふ

シテ、ツレ『汐汲車わづかなる、うき世にめぐるはかなさよ。ツレ『波こゝもとや須磨のうら、月さへぬらす袂かな。シテ『心づくしの秋風に、海はすこし遠けれども、かの行平の中納言、關吹き越ゆるとながめたまふ、浦回の波の夜々は、實に音近き海人の家、里離れなる通路の、月より外は友もなし。シテ『實にや浮世の業ながら、殊につたなき海人小舟の、わたりかねたる夢の世に、住むとや云はんうたかたの、汐汲車よるべなき、身は海士人の袖ともに、おもひを乾さぬ







(一)上略　須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人少にて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少しかき鳴し給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、懸わびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむと謠ひ給へる、後略（源氏物語、須磨卷）

(二)旅人の袂涼しくなりにけり關吹こゆるすまの浦風（續古今、羇旅、中納言行平）

心かな。下歌地謠『(一)かくばかり經がたく見ゆる世の中に、うらやましくも澄む月の、出汐をいざや汲まうよ、〳〵。上歌地『影はづかしき我姿、〳〵、忍車を引く汐の、跡に殘れる溜水、いつまですみは果つべき。野中の草の露ならば、日影に消えも失すべきに、是は磯邊に寄藻かく、海人の捨草いたづらに、朽ち增り行く袂かな。〳〵。

シテ『おもしろや馴れても須磨のゆふま暮、海人の呼聲幽かにて、おきにちひさきいさり舟の、影幽かなる月の顏、かりの姿や友千鳥、野分汐風いづれも實に、かゝる所の秋なりけり。あら心すごの夜すがらやな。

シテ『いざ〳〵汐を汲まんとて、汀に滿干の汐衣の、ツレ『袖を結んで肩に掛け、シテ『汐汲む爲とは思へども、ツレ『よしそれとても、シテ『女車、地『寄せては歸る渴(二)をなみ、〳〵、蘆邊の田鶴こそは立さわげ。四方の嵐も音添へて、夜寒なにと過さん。更け行く月こそさやかなれ。汲むは影なれや。燒く鹽煙心せよ。さのみなど海士人の、憂き秋のみを過さん。(三)松島や小島の海人の月にだに、影を汲むこそ心あれ。〳〵。

(一)かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな（拾遺、雜、藤原高光、詞書に、法師にならむと思ひ立ちける頃月を見侍りて）

(二)わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづなきわたる（萬葉、六、雜、山部赤人）

(三)松島や鹽くむあまの秋の袖月はもの思ふならひのみかは（新古今、秋、鴨長明）

松島やをしまのあまのすて衣思ふすれどぬるゝ袖かな（續千載、戀、前參議忠定）。

「松島や」にてシテ車の前に座し、扇をひらき、桶に左の手をかけすくひ入るゝ心。

ロンギ地『運ぶは遠き陸奥の、其名や(一)千賀の鹽竈、シテ『賤が鹽木を運びしは、阿漕(二)が浦に引く汐、地『其伊勢の海(三)の二見の浦、二度世にも出てばや。

シテ『松の村立かすむ日に、汐路や遠く鳴海潟、地『それは鳴海潟、こゝは鳴尾の松影に、月こそさはれ蘆の屋、シテ『灘(四)の汐汲む憂き身ぞと、人にや誰(五)も黃楊の櫛、地『さしくる汐を汲み分けて、見れば月こそ桶にあれ。

シテ『是にも月の入りたるや、地『うれしや是も月あり。シテ『月は一つ、地『影は二つ滿(七)つ汐の、夜の車に月を載せて、憂しともおもはぬ汐路かなや。

後見車を入る。シテ正面にて床几、ツレ其右に下に居る。ワキ立ち

ワキ「鹽屋の主の歸りて候。宿を借らばやと思ひ候。如何に是なる鹽屋の內へ案內申し候。」

ツレ「誰にて渡り候ふぞ。」

ワキ「是は諸國一見の僧にて候、一夜の宿を御貸し候へ。」

ツレ「暫く御待ち候へ、主に其由申し候ふべし。」

(一)わが思ふむもしろくみちのくのちかのしほかまちかつきにけり（續後撰、戀、山口女王）

(二)逢事をあこぎの島にひくあひのたひかさならばんもしりたん（古今和歌六帖、三、たひ、讀人不知）

忘れずよ旅をかさねて鹽木積む阿漕が浦になれし月かげ（新後拾遺、雜、崇金法師）

(三)玉くしげ二見の浦のかひしげみまきゑにみゆる松のむら立（金葉、雜、大中臣輔弘）

(四)藻の屋のなだの鹽くむ海士人もしぼるに袖のいとまなきまで（續古今、戀、後鳥羽院）

(五)昔男、津の國兎原郡鹽屋の里にしるよしして、いきて住みけり。昔の歌に、「あしの屋のなだの鹽燒いとまなみ黃楊の小櫛もささず來にけり」

と詠みけるぞ、この里をよみけるなりける。（伊勢物語）

（六）ツレ　車の前へ行き下に居、桶をのせ、綱をとり、かへりてシテに渡す。シテ左手にとる

（七）シテ　綱に右手をそへて、笛座の方に引きて行く

シテに向ひ

ツレ「如何に申し候。旅人の御入り候ふが、一夜の御宿と仰せ候。」

シテ「餘りに見苦しき鹽屋にて候ふ程に、御宿は叶ふまじきと申し候へ。」

ワキに

ツレ「主に其由申して候へば、鹽屋の内見苦しく候ふ程に、御宿は叶ふまじき由仰せ候。」

ワキ「いや〳〵見苦しきは苦しからず候。出家の事にて候へば、平に一夜を明かさせて賜はり候へと重ねて御申し候へ。」

ツレ「いや叶ひ候ふまじ。」

と左へかへりかゝると、シテ扇さし

シテ「暫く、謠『月の夜かげに見奉れば世を捨人、よし〳〵かゝる海人の家、松の木柱に竹の垣、夜寒さこそと思へども、蘆火にあたりて、御泊りあれと申し候へ。』

ツレ「此方へ御入り候へ。」

※上略
住ひたまへるさま、言はむ方なく唐めきたり。所のさま繪に畫きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、礎かなるものから、珍らかにをかし。後略
（源氏物語須磨卷）

ワキ「あらうれしやさらばかう參らうずるにて候。」

ワキ鹽家に入る心にて下に居る。

シテ「始めより御宿參らせたくは候ひつれども、餘りに見苦しく候ふ程に、さて否と申して候。」

ワキ「御志有難う候。出家と申し旅といひ、泊りはつべき身ならねば、何くを宿と定むべき。其上此須磨の浦に心あらん人は、わざともわびてこそ住むべけれ。※わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽たれつゝわぶと答へよと、行平も詠じ給ひしとなり。又あの磯邊に一木の松の候ふを、人に尋ねて候へば、松風村雨二人の海士の舊跡とかや申し候ふ程に、逆縁ながら弔ひてこそ通り候ひつれ。あら不思議や、松風村雨の事を申して候へば、二人共に御愁傷候、是は何と申したる事にて候ふぞ。』

シテは右にて、ツレは左にてシオル

シテ、ツレ『實にや思ひ内にあれば、色外に顯はれさぶらふぞや。わくらはに問ふ人あらばの御物語、餘りになつかしう候ひて、猶執心の闇浮の涙、

※わくらはに問ふ人あらばすまの浦に藻鹽垂つつわぶと答へよ
詞書に田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮内に侍りける人に遣はしける
（古今、雜、在原行平）

ふたゝび袖をぬらしさぶらふ。

ワキ『猶執心の闇浮の涙とは、今は此世に亡き人の詞なり。又わくらはの歌もなつかしいなどと承り候。かたゞ〳〵不審に候へば、二人ともに名を御名告り候へ。」

シテ、ツレ『恥かしや申さんとすればわくらはに、事問ふ人もなき跡の、世にしほじみてこりずまの、恨めしかりける心かな。クドキ『此上は何をかさのみ包むべき。是は過ぎつる夕暮に、あの松陰の苔の下、亡き跡とはれ参らせつる、松風村雨二人の女の、幽霊是まで來りたり。さても行平三年が程、御つれ〴〵の御船遊び、月に心は須磨の浦、夜汐を運ぶ海人乙女に、おとゞひ選ばれ参らせつゝ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより。*月にも馴るゝ須磨の海人の、シテ『鹽焼衣いろ替へて、かとりの衣の空焼なり。二人『かくて三年も過ぎ行けば、行平都にのぼりたまひ、ツレ『幾程なくて世を早う、去り給ひぬと聞きしより、シテ『あら戀しやさるにても、又いつの世の音信を、下歌地『松風も村雨も、袖のみぬれてよしなやな、身にも及ばぬ戀をさへ、須磨の餘りに罪深し、跡弔ひてたび給へ。

*汐風の渡かけ衣秋を經て月に馴れたる須磨のうら人
（新後撰、秋、藤原爲氏）

ツレ立ちて地前に行き下に居る

上歌地『戀草の露も思ひも亂れつゝ、〳〵、心狂氣に馴衣の、巳の日の祓や木綿四手の、神の助けも波の上、あはれに消えし憂き身なり。

（舞クセ）ツレ『あはれに古へを、思ひ出づればなつかしや、行平の中納言、三年はここに須磨の浦、都へ上り給ひしが、(一)此程の形見とて、御立烏帽子狩衣を、殘し置き給へども、是を見る度に、彌益の思草、葉末に結ぶ露の間も、忘られぼこそあぢきなや。(二)形見こそ、今はあだなれ是なくば、忘るゝひまもありな

松風

(一) 後見　烏帽子と長絹とをシテ持たす
(二) 形見こそ今にあだなれこれなくば忘るる時もあらまし物を（古今、戀、讀人不知）

んと、よみしも理や、なほ思ひこそは深けれ。シテ『(一)宵々に、ぬぎて我寢る狂衣　地『かけてぞ頼む同じ世に住むかひあらばこそ、忘形見もよしなしと、捨てゝも置かれず、取れば面影に立ち増り、起きふしわかで枕よ(二)り、跡より戀の攻め來れば、せんかた涙に、伏し沈む事ぞ悲しき。

物着、其位置にてシテの水衣を脱がせ長絹とかへ、烏帽子被す。シテ作物をちつと見て、靜に

シテ『三瀬川、絶えぬ涙の憂き瀬にも、亂るゝ戀の淵はありけり、

シテ『あらうれしやあれに行平の御立あるが、松風と召されさぶらふぞや、いて參らう。

作物に走りかゝる心、ツレ立ちて

ツレ『あさましや其御心故にこそ、執心の罪にも沈み給へ、娑婆にての妄執を、なほ忘れ給はぬぞや、あれは松にてこそ候へ、行平は御入りもさぶらはぬ物を。

シテ「うたての人の言事や、あの松こそは行平よ、謡『たとひ暫しは別るゝとも、*まつとし聞かば歸りこんと、連ね給ひし言の葉は如何に。

(一)宵々にぬぎてわがぬる狩衣かけて思はぬときのまもなし（古今、戀、紀友則）

(二)まくらよりあとよりこひのせめくればせむ方なみそ床なかに居る。（古今、詠歌、讀人不知）

*立わかれいなば山の嶺に生るまつとしきかば今歸り來む（古今、離別、在原行平）

ツレ『實になう忘れてさぶらふぞや、たとひ暫しは別るゝとも、待たば來んとの言の葉を、シテ『こなたは忘れず松風の、立ち歸りこん御音信、

ツレ『終にも聞かば村雨の、袖しばしこそぬるゝとも、シテ『待つに變らで歸りこば、ツレ『あら頼もしの、シテ『御歌や。上地『立ち別れ、

兩人シオリながら、ツレは地前に、シテは橋掛に行き、笛のイロエにて舞臺に入り中の舞。

シテ『いなばの山の峰に生ふる、松とし聞かば今歸り來ん。それはいなばの遠山松、下地『是はなつかし君こゝに、須磨の浦回の松の行平、立ち歸りこば我も木陰に、いざ立ち寄りて磯馴松の、なつかしや。

破の舞

上ギリ地『松に吹き來る風も狂じて、須磨の高波はげしき夜すがら、妄執の夢に見みゆるなり。我跡弔ひてたび給へ。暇申して歸る波の音の、須磨の浦かけて、吹くや後の山おろし、關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらん。〳〵。

舞臺の松を見て靜に留め。

# 暇の袋

男、長袴、小刀。

男白「罷出たる者は、此邊の者でござる。某幼馴染の女がござるが、みめ形見苦うて、朝寝を致し、たまたま起て大茶を飲べ、人事を云ひ、殊に大酒まで飲べて、醉狂を致し、何共迷惑に存ず。何時ぞは去りたい〳〵と存ずる所に、昨日より親里に歸つてござる程に、此暇の狀を持せてやつて、去らうと存ずる。先づ太郎冠者を喚び出し申付けう。やい〳〵太郎冠者、在るかやい。冠者「はあ。男「居たか。冠者「お前に居ります。男「汝喚び出すこと、別のことでない。其方も知る通り、女共がわゝしうて、何共堪忍ならぬ。夫故暇をやる程に、汝は此狀を持つて行て來い。冠者「畏つてござるが、さりながらあれは常のかみ樣とは異ひましてござる。私を好いとは仰せられますまい。お去りゆるされませ。男「いや〳〵苦しうない。少とも氣遣せず共、返事には及ばぬというて、置いて來い。冠者「左樣ではござるが、餘の御事は何なりとも致しませう。此事に於ては、おゆるされませ。男「扨は汝は、是程にいふに、女共は怖うて、身共は何共思はぬか、此上は獄でも應でも遣るが、ていと行まいか。（刀に手かくる。）冠者「あゝ、參りませう〳〵。男「何と行くか。冠者「中々。參りませう。男「夫なら早う行て來い。此を持つて行て、返事に及ばぬというて、其儘歸れ。冠者「畏つてござる。男「早う行け。冠者「心得ました。白「やれ〳〵、迷惑なことを仰付られた。此狀を渡したらば、身共を好いとはおしやるまい。腹を立てらるゝであらう。さりながら、主命ぢや、參らずばなるまい。誠に孫子に傳へてさすまい物は宮仕ぢや。やあ。參る程にこれぢや。物も案内も。女「やあ、今のは太郎冠者が聲ぢや。迎に來たか知らぬ。やあ太郎冠者、遲いと思うて迎に來たか。冠者「いや、何も

女、箔小袖、ゆばうし。

存じませぬ。御狀が參りました。（狀渡す。女狀見る。）女「なう〳〵、腹立や〳〵、妾が男めが、暇の狀をおこしおつた。やい、おのれはようこれを持つてうせた。おのれまで一つになつて、憎い奴の。おのれ摑みつかうか、嚙付かうか。腹立や〳〵。冠者「いや申々。先づ物を云はさせられ。私は參るまいと申してござれば、行かずば手討にせうと仰せられたに依つて、是非無う持つて參りました。何も存じませぬ。女「これはそちがいふ通り、知らぬこともあらう。それなら、そちは先へ歸れ。妾が其處へ行て用がある。それへ行かうと云うて歸れ。冠者「いや、御返事に及びませぬ。女「いや〳〵、それでも用があるは。行かねばならぬ。先へ行け。冠者「心得ました。白「されば、こそ。斯うあらうと思うた。先づ歸つて此通り申さう。ござりますか〳〵。男「太郎冠者、戻つたか。冠者「歸りました。扨も〳〵、殊の外腹を立させられて、早これへござります。男「何しに來るぞ。返事に及ばぬと云はいで。冠者「さう申しましたれども、行かねばならぬ用があると仰せられます。女白「なう〳〵、腹立や〳〵、藪を蹴出しても、あのやうな男は、二人や三人は蹴出すれども、騙したが憎い。此袋を持つて行て、致しやうがある。扨も〳〵、腹立や〳〵。身が燃えて腹が立つ。（男に向ひ）やいわ男、よう暇の狀おこしたなあ。おのれ喰付かうか、摑付かうか。あゝ腹立や〳〵。男「やい其處な奴。『男の一旦暇やるに、此處へ何しに來た。あつちへ行け。女「いかにもそちに執心で來たでも無い。ちといる道具があつて、取りに來た。男「それは何ぢや。女「此袋へ入る程の物ぢや。男「それ程の物はやらう程に、取つて行け。何ぢや。女「あれぢや。（指さし、向を敎へ）男「どれぢや。女「おれが欲しい物は是ぢや。（袋を男の首へ被せ、引く。）男「やれ。これは何とする。目が

見えぬわ。首が締る。許せ〳〵。女「何の許せ。如何でもつれて行て、妾が仕様がある。男「あゝ悲しや。最早去るまい。ゆるせ〳〵。

# 砧

ワキ　蘆屋殿、着附段織斗目、素袍上下、小刀、扇。

ツレ　夕霧、面小面又は孫次郎、髪、髪帯、着附浒、唐織着流。

ワキ舞臺の中央に出でて名宣る。ワキ出づる時ツレ、後につきて出で、シテ柱の傍に座して呼出しを待ち居る。

ワキ「是は九州蘆屋の何某にて候。我自訴の事あるにより在京仕りて候。假初の在京と存候へども、當年三歳になりて候。あまりに故郷の事心もとなく候ふ程に、めしつかひ候ふ夕霧と申す女を下さばやと思ひ候。」

ツレに向ひ

ワキ「いかに夕霧、あまりに故郷心もとなく候ふ程に、おことを下し候ふべし、此年の暮には必下るべき由心得て申し候へ。」

ツレ「さらばやがて下り候ふべし。かならず此年の暮には御下りあらうずるにて候。」

ワキ幕に入り、ツレ常座にて道行を謡ふ

道行『此程の、旅の衣の日も添ひて、〳〵、いく夕暮の宿ならん、夢も數そふ假枕、明かし暮らして程もなく、蘆屋の里につきにけり。〳〵。

ツレ「急ぎ候ふ程に、蘆屋の里に着きて候。やがて案内を申さうずるにて候。」

橋掛より幕に向ひ

ツレ「いかに誰か御入り候。都より夕霧が參りたる由御申し候へ。」

後見座にくつろぐ。アシラヒにてシテ出で三の松にて

シテ『夫れ鴛鴦の衾の下には立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上には波を隔つる愁ひあり。ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草、我は忘れぬ昔を泣きて、袖にあまれる涙の雨の、晴間まれなる心かな。

シテ　蘆屋妻、面深井又は曲見、髪、髪帯、着附浒、唐織着流、扇。

ツレ立ちて

ツレ「夕霧が參りたる由それ〳〵御申し候へ」

シテ「何夕霧と申すか、人までもあるまじ此方へ來り候へ。」（イ（何夕霧と申すか、恨めしながら珍らしや）

ツレと入替り舞臺に入り、シテは地謡座前に、ツレは中ゆに對座して

シテ「いかに夕霧めづらしながら恨めしや。人こそ變はり果て給ふとも、風の行方のたよりにも、などや音づれ無かりけるぞ。」

ツレ「さん候とくにも參りたく候ひつれども、御宮づかひの隙も無くて、心より外に三年まで、都にこそ候ひしか。」

シテ「なに都ずまひを心の外とや、謡『思ひやれ實には都の花ざかり、なぐさみ多きをり〳〵にだに、憂きは心の習ひぞかし、下歌地『鄙の住居に秋の暮れ、(一)人目も草もかれ〴〵の、契りも絶えはてぬ。何を頼まん身のゆくへ、上歌地『三年の秋の夢ならば、〳〵、憂きは其まゝ覺めもせで、思出は身に殘り、昔はかはり跡もなし。(二)實にや偽りの、なき世なりせば如何ばかり、人の言の葉うれしからん。愚の心やな、愚なりける頼みかな。

此時ふと物音を聞きつけたる心にて面を上げ

シテ「あら不思議や、何やらんあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ふぞ。」

(一)山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば（古今、冬、源宗于）

(二)偽のなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし（古今、戀、讀人不知）

ツレ「あれは里人の碪打つ音にて候。」

シテ『げにや我身の憂きまゝに、古事の思ひ出でられ候ふぞや。唐に蘇武といひし人、胡國とやらんに捨ておかれしに、故郷にとゞめおきし妻や子、夜寒の寢覺を思ひやり、高樓に登つて碪を打つ。志の末通りけるか、萬里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の碪聞えしとなり。謡『妾も思ひや慰むと、とてもさびしきくれはとり、綾の衣を碪に打ちて、心を慰まばやと思ひ候。

ツレ「いや碪などは賤しき者の業にてこそ候へ。さりながら御心なぐさめん爲にて候はゞ、碪をこしらへて參らせ候ふべし。」

シテ後見座にくつろぎ右の肩を脱ぎ、ツレ地前にて下に居る。後見砧の作物か脇座前に出だす。

シテ常座に立ちて謡ふ。以下謡に合せて形あり

シテ『いざ〳〵碪打たんとて、馴れて臥猪の床の上、ツレ『涙かたしくさ莚に、シテ『思ひをのぶる便りぞと、ツレ『夕霧立ちより諸共に、シテ『恨みの碪

ツレ『打つとかや。

地次第『衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん。シテ『音づれの、稀なる中の秋風に、地『憂きを知らする夕かな、

イロエ

シテ『遠里人もながむらん、地『誰が世と月はよも訪はじ、シテ『面白の折からや、頃しも秋の夕つ方、地『牡鹿の聲も心凄く、見ぬ山風を送りきて、梢は何れ一葉ちる、空すさまじき月影の、軒の忍ぶに移ろひて、シテ『露の玉垂かゝる身の、地『思をのぶる夜すがらかな。*宮漏高く立ちて風北に廻り、シテ『隣砧緩く急にして月西に流る。地『蘇武が旅寢は北の國、是は東の空なれば、西より來る秋の風の、吹き送れと、間遠の衣打たうよ。

*宮漏高低風北廻
隣砧緩急月西傾
（新撰朗詠集、上、秋夜、具平親王）

地『故郷の、軒端の松も心せよ己が枝々に、嵐の音を殘すなよ。今の碪（イは）の聲そへて、君がそなたに吹けや風。餘りに吹きて松風よ、わが心、通ひて人に見ゆならば、其夢を破るな。破れて後は此衣、誰か來ても訪ふべき。來て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも更へなん。夏衣、うすき契は忌まはしや、君が命は長き夜の、月にはとても寢られぬに、いざ〳〵衣打たうよ。彼七夕の契りには、一夜ばかりの狩衣、天の河波立ち隔て、逢ふ瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき露なみだ、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波うち寄せようたかた。シテ『文月七日の曉や、地『八月九月、實にまさに長き夜、千聲萬聲の、憂きを人に知らせばや、月の色風のけしき、影におく霜までも、心すごき折ふしに、碪の音夜嵐、かなしみの聲蟲の音、まじりて落つる露涙、ほろ〳〵はら〳〵〳〵と、いづれ碪の音やらん。

（一）謠蒙恩歸秋搗帛
月苦風凄砧杵悲
八月九月正長夜
千聲萬聲無了時
應到天明頭盡白
一篝添得一蓋絲
（白氏文集、十九、閨夜砧）

「ほろ〳〵はら〳〵」にて扇を槌の心にて打ち或は打つ心にて作物に向ひ居たるが謠切れて正面に直す。その時ツレ立ちてシテの後を廻り下に居て

ツレ「いかに申し候。都より人の参りて候ふが、此年の暮にも御下りあるまじきにて候。」

シテ『恨めしやせめては年の暮をこそ、偽りながら待ちつるに、さてはは
や誠に變はり果て給ふぞや、下歌地『思はじと思ふ心も弱るかな、上歌地『聲
も枯野の蟲の音の、亂るゝ草の花心、風狂じたる心地して、病ふの床に
伏し沈み、つひに空しくなりにけり。〳〵。

（評に立ちて幕に入る、病死の心。ツレもあとに附きて入る。中入。アヒ、北の方病死のいはれを語り、痛はしく思ふ旨を述べて入る。後ワキ太刀持を従へ、舞臺中央に出ず下に居て謡ふ）

ワキ「無慙やな三年過ぎぬる事を恨み引き別れにし妻琴の、つひの別れ
となりけるぞや。」（イ（さこそ契りし妻琴の、引別れにし其まゝにて）

謡『さきだたぬ悔の八千度百夜草、悔の八千度百夜草の、陰よりも二度、
歸りくる道と聞くからに、梓の弓の裏弭に言葉をかはすあはれさよ。
〳〵。

（後ワキ　著附無地廣斗目、素袍の下計り、掛絡、扇、數珠。トモ從者　素袍上下太刀持つ
（二）さきだたぬ悔の八千度百夜草は沈める水の歸りこぬなり（古今、哀傷、閑院）

合掌す。出端にて後シテ杖つきて出づ。橋掛一の松にて

後シテ　妻の亡靈、面況眼、鬘女、鬘女、又は檜垣女、著附厚板、箔帯折、色大口腰帯、扇、杖
＊舞臺に入り、以下謡につれて形種々あり

後シテ『三瀬川、沈みはてにしうたかたの、あはれはかなき身のゆくへか
な。標梅花の光を竝べては、娑婆の春をあらはし、地『＊跡のしるべの燈は、
シテ『眞如の秋の月を見する。さりながら我は邪婬の業ふかき、思ひの煙
の立居だに、安からざりし報いの罪の、亂るゝ心のいと責めて、獄卒阿
防羅刹の、標の數のひまもなく、打てや〳〵と報いの礎、恨めしかりけ
る因果の妄執、地『因果の妄執の思ひの涙、礎にかゝれば、涙はかへつて
火焔となつて、胸の煙の焔にむせ
べば、叫べど聲が出でばこそ、礎も
音なく松風も聞えず、呵責の聲の
み恐ろしや。
地『羊のあゆみ隙の駒、〳〵、うつり
ゆくなる六つの道、因果の小車の、
火宅の門を出でざれば、めぐりめ
ぐれども、生死の海は離るまじや、

あぢきなの浮世や、シテ『恨みは葛の葉の、地『恨みは葛の葉の、歸りかねて執心の面影の、恥かしや思ひ夫の、二世と契りてもなほ、末の松山千代までと、かけし頼みはあだ浪の、あらよしなや、空言や、そもかゝる人の心か。シテ『烏(一)てふ、大をそ鳥も心して、地『うつし人とは誰かいふ。草木も時を知り、鳥獣も心あるや。げにまこと喩へつる、蘇武は旅雁に文を附け、萬里の南國に至りしも、契りの深き志、淺からざりし故ぞかし。君いかなれば旅枕、夜寒の衣うつゝとも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや恨めしや。

シテ打ちシオル。

キリ地『法華讀誦の力にて、〳〵、幽靈まさに成佛の、道明らかになりにけり。是も思へば假初に、打ちし礎の聲の内、開くる法の花心、菩提の種となりにけり。〳〵。

合掌して留め。

(一) 烏とふ大をそ鳥のまさでにも、來まさぬ君をころくとぞ鳴く（萬葉集十四、東歌）

# 宗論

法華　狂言袴（括る）水衣、能力頭巾、草の實數珠、塗笠、扇。
浄土　狂言袴、角頭巾、へんてつ、黒玉數珠、塗笠、扇。

法華次第『妙法蓮華經、蓮華經の經の字を、ぎやうさんと人や思ふらん。」「罷り出でたるは、都本國寺の坊主でござる。このたび思ひ立ち、甲斐の身延に參詣致し、只今下向道でござる。やれさて、身延と申す所は、聞き及うだよりは、殊勝な所でござる。若い折にかやうに修行を致さねば、老いての物語が無いと申す。先づそろ〳〵上りませう。いや、程は參らぬども、草臥れでござるほどに、まづこの所にすこし休らひませうず。

浄土次第『南無阿彌陀佛の六の字を、むづかしく人や思ふらん。」「罷り出でたるは、東山黒谷の愚僧でござる。信濃國善光寺へ參り、只今下向道でござる。まづそろ〳〵上りませう。あれへよさうなる道づれが行かるゝ、呼びかけ道づれに致さうと存ずる。しゝ、申し。法華「こなたの事でござるか。浄土「なか〳〵。法華「何の御用でござるぞ。浄土「こなたはどれからどれへござるぞ。法華「いや、かう上方へ參る愚僧でござる。浄土「え、身共も上りまする。卒爾ながら、道づれにもならしやるまいか。法華「いや、身共もつれ欲しいと存ずる所に、合うたり叶うたる事でござる。都までは同道申さう。はれさて嬉しや。さ、ござりませい。浄土「まづござれ。先でござる程に。法華「參らうか。浄土「ござれ〳〵。なう申し、かうして、同道申すからは、乃至はこなたの方にも、又身共が方にも、五日十日暇のいる事がござろと、まゝよ、待合せ同道致さうぞ。法華「なか〳〵、

五日十日の事はさて置かつしやれい、一貫日でも待合せ、都までは同道申す。浄土「はれさて、よい御坊に出逢うた事かな。して、こなたは、都は何處許にござるぞ。法華「いや、本國寺の愚僧でおぢやる。浄土（正面向き獨語）「いや、きやつは家例の情強（こはゝ）でおぢやる。道すがら爭ひませうず。法華「なう〳〵、御坊、して、そなたは又何處許でおぢやるぞ。浄土「いや、も、何處と申したらば、京邊土の者でおぢやる。法華「いや、さう仰やれば、心にくうおぢやるほどに、名乘らしやれ。浄土「その儀ならば、名乘りませう。黑谷の坊主でおぢやる。法華（側向き獨語）「はれさて、おとましい者とつれだつたことぢや。浄土（獨語）「いやはや、も、いやがると見えました。法華「なう、坊、して、其方は又、此方へは、どれへ行かしましたぞ。浄土「いや。信濃國善光寺へ參つておぢやる。法華「やあ、參らいで、叶ひそむない坊主ぢや。浄土「して又、其方は何の方へ行かしましたぞ。法華「いや、甲斐の身延へ參詣致した。浄土「おゝ、參らいで、叶はぬ御坊ぢや。法華「なう〳〵、御坊、其方に意見したうおぢやるわいの。浄土「何でおぢやるぞ。法華「彼所の隅でも、此所でも、黑豆を數へくど〳〵と、願はうよりも、其方、その數珠を切つて、法華にならせませ。浄土「いや〳〵、法華にはなりともなうおぢやる。其方にも意見がしたいは。一部八卷の二十八品などとて、事むづかしい事を願はうよりも、南無阿彌陀佛とさへ申すればよいに、某が法にならせませ。法華「はつたと忘れた事がおぢやる。彼の向に見ゆる在所へ、某は寄らねばならぬ。浄土「いや、某も寄らう。法華「いや、先へ行かしませ。浄土「いや、待合はせうと約束でおぢやる。（法華逃げかゝるを呼び掛く）なう〳〵。法華「其方のやうなる人に、かまはうよりも、某は先へ行たがようおぢやる。（浄土なはづしたる心にて小走り）

やど　長袴、扇。

鬘白はあ、嬉しや、逃げ延びてござる。浄土（追付き法華とくつつくやうにして）「なう、御坊、はてさて人に走らしやつた。法華「え、こゝな其方とおれと、あみつれた身かいの。浄土「いや、都までは同道申すとの約束でおぢやる。法華「いやはや、つれだてならばつれだたうほどに、某が數珠は辱くも、日蓮上人より傳りの數珠ぢやほどに、ちつと戴きやれ。浄土「戴きたか、そち戴け。法華「いや、是非共戴かせう。こりや〳〵、（數珠を浄土の笠に觸れ）はあ、嬉しや、思ふまゝに戴かした。浄土「なう、なう、某が數珠も辱くも、法然上人より傳りの數珠、ちつと戴きやれ。これ〳〵、（前の如くし）はあ、嬉しや、戴かした。（大笑、此内に法華はづす）まゝと戴かせう。（法華の見えざるに心付き）鬘白いやこりや、見失うた。はてさて、もつけな事をした。（浄土くつろぐ）法華鬘白「はあ、嬉しや逃げ延びてござる。まづこの所に宿をとりませう。ものも。お案内。やど「や、表に案内がある。お案内はどなたでござるぞ。法華「いや、旅の坊主でござる。一夜の宿を貸さつしやれい。やど「易い事でござる。奥の間へ通らしやれい。法華「畏つてござる。亭主、出家の相宿厭でござるぞ。やど「心得ました。浄土鬘白「これは扨、これほどには行き延びはせまいが、日も晩じてござるほどに、宿をとりませう。ものも、お案内。やど「や、表に案内がある、案内はどなた。え、最前のやうな御坊ぢや。浄土「なうなう、最前も、某がやうなる坊が、宿を取つてござるか。やど「なか〳〵、宿を取らしやれてござる。浄土「某にも貸して下されい。やど「いや、出家の相宿はなりませぬ。浄土「いや、さきほどの御坊

と某は、弟子兄弟でござるが、言葉論を致し、先へござるほどに、某にも貸して下されい。や、「心得ました。

浄土（舞臺に入り法華の坐し居るを見て）「なう〳〵、御坊。法華「いや、其方は何として來たぞ。（立つて亭主を呼び）なう御亭主、別の間はおぢやらぬか。浄土「はてさて、ないとおしやるわいの。法華「其方が構うてのやうわいの。して其方は、某に後先に附いてまふは、法問ばし爲ても見ようと思やるか。浄土「いや、まことに、よいところへ氣がついた。夜長にもおぢやる程に、いざ、法問を致さうず。法華「まづ、したらば、其方からおしやれ。浄土「まづ、そつちおしやつたがよいわ。法華「ふん、其儀ならば語らうほどに、どちらなりとも、負けた方を、數珠を切らすほどに、さう心やれ。浄土「まづお語りやれ。法華「耳の垢を取りて聞かせませ。まづ、五する展轉隨喜の功德といふ事がある。聞きやつた事があらう。浄土「まことに、どこでやら聞いておぢやる。法華「聞かいで何とせう。三國に憚るほどの法問ぢや。浄土「まづ、いかい事をいはずとも、語らせませ。法華「まづ、五するてんでんずるきの功德、又は淚とも、解かせられたる法問な、大地を割り、芋の子を植うる、天地の潤を以てずるきを出す。丈ゆる〳〵とせいじんしたるを、及物で以て薙倒し、芥子で辛々と蠶へ、檀方がたで下さるゝ時は、尊うて、ありがたうて、淚がこぼるゝを以て、五するてんぐ〳〵、ずるきの功德、又は淚とも解かせられたる法問な、有難いことではおぢやらぬか。浄土「たつた解かせませ。法華「いや、これまでおぢやる。浄土「して、それはまことでおぢやるか。それは芥子が辛うて、淚がこぼれたものでおぢやらう。法華「まづ、小言を言はずとも、其方も解かせませ。浄土「おゝ、宗論でおぢやるほどに、某も申そ。これへよりて聞かせませ。一念彌陀佛、卽滅無量罪と云ふ事がある。お聞きやらうのう。法華「おゝ、まことに聞きはつつたやうにおぢやる。浄土「其方の身の上にもある事、又某が身の上にもある事、だんばう方へ齎に參れば、事足らうたる御方へ參れば、醍醐の烏頭芽、鞍馬の木の芽漬、半べん、麩、椎茸、無量のさいを滿ち〳〵て下さるる。彼の事足らはぬ御方へ參れば、燒鹽一榮で下さるる。彼の、無量の菜が滿ち〳〵てあると思うて、心に觀念して下さるゝを以て、一念彌陀佛、卽滅無量罪、又は菜とも解かせられたる法問な、ありがたうおぢやらぬか。法華「たつた解かせませ。浄土「これまでおぢやる。法華「して、それがまことでおぢやるか。浄土「なか〳〵、法華「悉皆たゞ、それはむざいがきといふものでおぢやる。浄土「いや〳〵、むざいがきではおぢやらぬ。法華「無いものを有ると思うて食へば、むざいがきではおぢやらぬか。浄土「いや、そちがやうな者に構はうよりも、非學者論議に負けじといふ事がある。まづ、念佛しゆ致したが好い。（とて寢る）法華「いや、まつと云はしまさいで。いや某もちと、まどろみませう。浄土（起き上りて）「いや、とかう申す間に、御經時になつた。（笠を前に伏せ木魚の心にて扇にて打つ樣をし）くわ〳〵。なまいだ。（といひつつ、法華の寢てゐる側へ次第により行き耳へ口をよせ高くなまいだ〳〵と呼び、又元の所に歸り經をよむ）法華（起きかゝりて）「悉皆彼の坊主は、夜の目が寢られぬと見えた。某も看經を致さう。（笠を鐘の心にて浄土の如く打ちジヤブ〳〵といふ）浄土「いや、負けじ劣

らじと精を出さるる。何とがなして、彼の坊を浮かしたいと存じまする。いや、思ひつけた事がござる。一遍上人の踊念佛がござる、これを申しませう。（立ち、數珠を懷に入れ、扇にて笠をたゝきつゝ）なもだ〳〵。法華讃白「いや、某も負けは致すまい。（同じく笠をたゝき）蓮華經々々々、淨土「南無だ。法華「蓮華經々々々。淨土「ハ、南無だ。法華「ハ、蓮華經。（次第に調子に乘り、後には法華が念佛を唱へ、淨土が題目を唱へて、互に口に手をあて）法華淨土「これは如何な事、取り違へてのけた。同吟謠「實に今思ひ出したり、昔在靈山妙法花、今在西方妙阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體と。この文の聞く時は、法華も彌陀も隔はあらじ、今よりしてはふたりが名をば、妙阿彌陀佛とぞ付かうよ。

ワキ　實際左斷門、梨子打烏帽子、白鉢卷、着附厚板、込大口、直垂上下、小刀、扇、太刀。
狂言　太刀持、狂言上下、扇、太刀。

## 安宅

ワキ太刀持の狂言方を從へて出で、舞臺にて名宣る。

ワキ「かやうに候ふ者は、加賀の國富樫の何某にて候。扨も頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作り山伏と爲つて、奥へ御下向の由頼朝きこしめし及ばれ、國々に新關を立てゝ、山伏をかたく擇び申せとの御事にて候。さる間此所をば某承つて山伏を留め申し候。今日も堅く申し付けばやと存じ候。」

太刀持を呼び

ワキ「如何に誰かある。」

狂言「御前に候。」

ワキ「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申し候へ。」

狂言「畏つて候。」

ワキ脇座に太刀持は其下に坐す。次第にて子方の判官を先きに立て、シテ、ツレ、強力の狂言方合せて十二人、舞臺に入り、二行に向合ひて謠ふ

シテ、ツレ次第『旅の衣は篠懸の、〳〵、露けき袖やしほるらん。

地取の代りに狂言方「おれが衣は篠懸の、破れて事やかきぬらん」と謠ふ。

シテ、ツレ『鴻門楯破れ都の外の旅衣、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙なれ。シテ『さて御供の人々には、ツレ『伊勢の三郎駿河の次郎、片岡增尾常陸坊、シテ『辨慶は先達の姿となりて、ツレ『主從以上十二人、いまだ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめて いつまでの、限りもいさや白雪

兜巾、着附厚板、白大口、水衣、腰帶、篠懸、小刀、扇。子方ツレ、シテと同じ。
アヒ　強力、兜巾、狂言袴、脚半、篠懸、笈、杖、笠。

の、越路の春にいそぐなり。

シテ、ツレ上歌『時しも頃は二月の、〳〵、十日の夜、月の都を立ち出(一)でて、是やこの、行く歸るも別れては、〳〵、知るも知らぬも逢坂の、山隱(二)す、霞ぞ春は恨めしき。〳〵。下歌『波路遙に行舟の、〳〵、海津の浦に着きにけり。東雲はやく明け行けば、淺茅(三)色づく有乳山、上歌『氣比の海、宮居久しき神垣や、松の木芽山、なほ行くさきに見えたるは、杣山人の板取、河瀨の水の淺洲津(みおつ)や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に着きにけり。〳〵。

シテ「いかに申し上げ候。暫く此所に御休みあらうずるにて候。」

着詞の中、ワキ、太刀持立ち、後へ引き向き合ひ下に居る。シテ、後見座にくつろぎ、于方脇座に行きて床几、ツレ山伏其次に順々に下に居る。それよりシテ舞臺中央に出で正面向き下に居る。

判官「如何に辨慶。」

シテ「御前に候。」

判官「唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。」

(一)これや此行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關
(後撰、雜、蟬丸)
(二)山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ
詞書　あづまの方より罷へまうでんとて道にてよめる
(古今、羈旅、おと)
(三)八田の野の淺茅色づく有乳山峯の沫雪寒くふるらし
(萬葉十、冬雜歌、柿本人麿)
(新古今、冬、にも出づ)



シテ「いや何とも承らず候。」

判官「安宅の湊に新關を立てゝ、山伏を堅く擇ぶとこそ申しつれ。」

シテ「言語道斷の御事にて候ふ物かな。さては御下向を存じて立てたる關と存じ候。是はゆゝしき御大事にて候。まづ此傍(イ所)にて暫く御談合あらうずるにて候。」

ツレの山伏達に向ひ

シテ「是は一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御意見御申あらうずるにて候。」

ツレ「我等が心中には、何程の事の候ふべき、唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候。」

シテ「暫く候。仰せの如く此關一所打ち破つて御通りあらうずるは易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして無異の義が然るべからうずると存じ候。」

判官「ともかくも辨慶はからひ候へ。」

シテ「畏つて候。（暫く思案する心にて）某急度案じ出だしたる事の候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候ふが、何と申しても御姿隠れ御座なく候ふ間、此まゝにては如何と存じ候。恐れ多き申事にて候へども、御篠懸をのけられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、如何にもくたびれたる御體にて、我等より跡に引きさがつて御通り候はば、中々人は思ひもより申すまじきと存じ候」

判官「げに是は尤にて候。さらば篠懸を取り候へ。」

シテ「承はり候。」

後に控へたる狂言の強力に向ひ

シテ「如何に強力。」

狂言「御前に候。」

シテ「笈を持ちて來り候へ。」

狂言「畏つて候。」

狂言笈を持ち來りてシテに渡す。留のツレ笈を受け取りて、子方へ行く。子方床几を離れ、後向く。ツレ二人にて子方の兜巾、篠懸、水衣を取り、笈を負はせ笠を被す。子方金剛杖を右に置きて向きなほる。

此間にシテ狂言に向ひ「汝が笈を御肩に置かるる事は、なんぼう冥加もなき事にては無きか。まづ汝は先きへ行き關の樣體を見て、誠に山伏を揶ぶか、又左樣にてもなきか、慥に見て來り候へ。」狂言「畏つて候。」とて見咎められぬ爲に兜巾を懐中にかくし、橋掛一の松に行き、遙に關所觀望の狀をなし「あれに見ゆるが關ぢや。さても〳〵おびたゝしい體かな。矢倉かい楯をあげ、中々用心きびしい體ぢや。やあ又あの木のそらに、何やら眞黑なものが四つ五つかけてあるは何ぢや。山伏のこゝぢや」とて我首に手をやり、「さても〳〵痛はしい事かな。餘り痛はしい事ぢや程に、一首つられて歸らう。山伏は見ふいてこそ逃げにけれ、誰おひかけてあびらうんけん、あびらうんけん」とて舞臺に歸り、シテに關の樣體を報告し、一首つられたる由をいふ。シテ「何とつられたるぞ」と問ふに、前の狂歌を述ぶ。シテ「汝はこざかしき者にてある。御あとより來り候へ」といふ。狂言くつろぐ。シテ「さらば御立あらうずるにて候」といひて、子方杖つき皆々立ち上る。

シテ『實にや紅は園生に植ゑても隠れなし。ツレ『強力にはよも目を懸けじと、御篠懸を脱ぎ替へて、麻の衣を御身にまとひ、シテ『あの強力が負ひたる笈を、判官『義經取つて肩に懸け、ツレ『笈の上には雨皮形箱取り付けて、判官『綾菅笠にて顔をかくし、ツレ『金剛杖にすがり、判官『足痛げなる強力に

て、地『よろ〳〵として歩み給ふ御ありさまぞ痛はしき。

シテ（子方に向ひ）「我等より跡に引き下つて御出あらうずるにて候。（ツレに向ひ）さらば皆々御通り候へ。」ツレ「承り候。」

子方後見座にくつろぐ、一行に遅れたる心。シテ先きに立ち、橋にかゝる心にて橋掛へ行き、幕際より廻りて舞臺に入る。ツレ順々にシテに從ひ、橋掛に立ち居る。ワキの太刀持シテの橋掛にかゝるを見つけてワキに

太刀持狂言「如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。」

ワキ「何と山伏の御通りあると申すか、心得てある。（とて立ちシテの仕手柱を越すを見て）なうなう客僧達、是は關にて候。」

シテ「承り候。是は南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣はされ候。北陸道をば此客僧承つて罷り通り候。先勸めに御入り候へ。」

ワキ「近頃殊勝に候。勸めには參らうずるにて候。去りながら、是は山伏達に限つて留め申す關にて候。」

シテ「さて其謂は候。」

ワキ「さん候。賴朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を賴み給ひ、十二人の作り山伏となつて、御下向の由其聞え候ふ間、國々に新關を立てゝ、山伏をかたく擇び申せとの御事にて候。さる間、此所をば某承つて山伏を留め申し候。殊に是は大勢御座候ふ間、一人も通し申すまじく候。」

シテ「委細承り候。それは作り山伏をこそ留めよと仰せ出だされ候ひつらめ、よも誠の山伏を留めよとは仰せられ候ふまじ。」

太刀持狂言「いや昨日も山伏を三人迄切つたる上は候。」

シテ「さて其切つたる山伏は判官殿か。」

ワキ「あらむつかしや問無益答は、一人も通し申すまじい上は候。」

シテ「さては我等をも是にて誅せられ候はんずるな。」

ワキ「中々の事。」

シテ「言語道斷、かゝる不祥なる所へ來かゝつて候ふものかな。此上は力及ばぬ事、さらば最期の勸めを始めて、尋常に誅せられうずるにて候。（橋掛のツレに向ひ）皆々近う渡り候へ。」ツレ「承り候。」

シテを始めツレ一人づつ、舞臺に入り、シテは正面先に、ツレ二行、杉なりにならぶ。扇さし數珠右に持つ。

シテ『いで〳〵最期の勤めを始めん。夫れ山伏といつぱ、役の優婆塞の行儀を受け、ツレ『其身は不動明王の尊容をかたどり、シテ『兜巾といつぱ五智の寶冠なり。ツレ『十二因縁のひだをするて戴き、シテ『九會曼荼羅の柿の篠懸、ツレ『胎藏黑色のはゞきをはき、シテ『さて又八目の草鞋（わらぢ）は、ツレ『八葉の蓮華を踏まへたり。シテ『出で入る息にあうんの二字を稱へ、ツレ『卽身卽佛の山伏を、シテ『こゝにて討ちとめ給はん事、ツレ『明王の照覽はかりがたう、シテ『熊野權現の御罰の當らん事、ワキ『立ちどころにおいて、シテ『疑あるべからず。地『唵阿毗羅吽欠と、數珠さら〳〵と押しもめば、

何れも數珠する。

ワキ『近頃殊勝に候。先に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候ふ間、定めて勸進帳の御座なき事は候ふまじ。勸進帳を遊ばされ候へ、是にて聽聞申さうずるにて候。」

シテ『何と勸進帳を讀めと候ふや。心得申して候。」

シテ、ツレの間を通りて後見座に行き卷物を左に持ち、中央に出で

シテ『もとより勸進帳はあらばこそ。笈の中より往來の卷物一卷取り出だし、勸進帳と名付けつゝ、謠『高らかにこそ讀み上げけれ。

卷物開き見て

夫れつら〳〵惟ん見れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隱れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。こゝに中頃帝おはします、御名をば聖武皇帝と名付け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみがたく、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思ひを善途に飜して、盧遮那佛を建立す。かほどの靈場の、絶えなん

事を悲しみて、俊乘坊澄源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、此世にては、無比の樂に誇り、當來にては、數千蓮華の上に座せん。歸命稽首敬つて白すと、天も響けと讀み上げたり。

ワキ『關の人々肝を消し、地『恐れをなして通しけり。〳〵。

ワキ詞「急いて御通り候へ。」

シテ詞「承り候。」

シテツレの中を通り、卷物を後見に渡し、橋掛に行く。ツレもあとにつき橋掛に行き正面向き竝ぶ。子方後見座より立ち一行よりおくれたる心にて仕手柱の邊に來りたる時

太刀持狂言「如何に申し上げ候。判官殿の御通り候。」

ワキ「如何に是なる强力とまれとこそ。」

子方下に居、杖を肩ぐ。ツレ、ワキにかゝりて

ツレ「すは我君を怪しむるは、一期の浮沈極まりぬと、皆一同に立ち歸る。數珠を懷中し、小刀に手を掛く。シテ兩手ひろげて走り出で、先のツレを押し留め

シテ「あゝ暫く。あわてゝ事を仕損ずな。（子方に向ひ）やあ、何とてあの强力は通らぬぞ。」

ワキ「あれは此方より留めて候。」

シテ舞臺に入りワキに向ひ

シテ「それは何とて御とめ候ふぞ。」

ワキ「あの强力がちと人に似たると申す者の候ふ程に、さて留めて候ふよ。」

シテ「何と人が人に似たるとは、めづらしからぬ仰せにて候。さて誰に似て候ふぞ。」

ワキ「判官殿に似たると申す者の候ふ程に、落居の間留めて候。」

シテ「や、言語道斷、判官殿に似申したる强力めは一期の思出な。腹立ちや日高くは、能登の國まで差さうずると思ひつるに、わづかの笈負うて跡に下ればこそ人も怪しむれ。總じて此程、につくしにくしと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取りて散々に打擲す。（子方の杖を取り、笠を打ち）通れとこそ。」

子方立ちて後見座にくつろがんとするをワキせまる

シテ「や、笈に目を懸け給ふは、盜人ざうな。」

と詰めよる。次の地謠の間、ツレ一同にワキへ押し寄するをシテ金剛杖にて制しとゞむること二三回あり。ワキも小刀に手をかけて之に應ず。

地『かたゞ〳〵は何故に、〳〵、か程賤しき强力に、太刀刀をぬき給ふは。めだれ顏の振舞は、臆病の至りかと、十一人の山伏は、打刀ぬきかけて、勇みかゝれる有樣は、如何なる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。

ワキ「近頃誤りて候。はや〳〵御通り候へ。」

ワキ太刀持共囃子方後にくつろぐ。ツレ地謠座前にならぶ。子方兜巾・篠懸して出て脇座に行く。シテ後見座より出で

シテ詞「先の關をば早拔群に程隔たりて候ふ間、此所に暫く御休みあらうずるにて候。（ツレに向ひ）皆々近う御參り候へ。」

皆々下に居る。子方床几。シテ中央に行き子方に禮し

シテ「如何に申し上げ候。さても唯今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働きを仕り候ふ事、謠『是と申すに君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、いよ〳〵あさましうこそ候へ。

判官「さては悪しくも心得ぬと存ず。如何に辨慶、さても唯今の機轉更に凡慮より爲すわざに非ず、唯天の御加護とこそ思へ。謠『關の者ども我を怪しめ、生涯限りありつる處に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、散々に打つて我を助くる、是れ辨慶が謀に非ず八幡の、地『御託宣かと思へば、忝くぞおぼゆる。

クリ地『夫れ世は末世に及ぶといへども、日月はいまだ地に落ち給はず、たとひ如何なる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬことや有るべき。判官『實にや現在の果を見て、過去未來を知ると云ふ事、地『今に知られて身の上に、憂き年月の二月や、下の十日の今日の難を、のがれつるこそ不思議なれ。判官『唯さながらに十餘人、地『夢の覺めたる心地して、互に面を合はせつゝ、泣くばかりなる有樣かな。

（居クセ）クセ『然るに義經、弓馬の家に生れ來て、命を賴朝に奉り、屍を西海の波に沈め、山野海岸に、起き臥し明かす武士の、鎧の袖枕かたしく隙も波の上、ある時は舟に浮び風波に身を任せ、ある時は山脊の、馬蹄も見えぬ

雪の内に、海少しある夕波の、立ちくる音や須磨明石の、とかく三年の程もなく、敵を亡ぼし靡く世の、其忠勤も徒らに、なりはつる此身の、そも何といへる因果ぞや。判官『實にや思ふ事、叶はねばこそ憂き世なれと、地『知れどもさすがなほ、思ひ返せば梓弓の、すぐなる人は苦しみて、讒臣は彌増に世に在りて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや、恨めしの憂き世や、あら恨めしの憂き世や。

（クセ留にてワキは太刀持を從へて橋掛に出で、謠すみて）

ワキ「如何に誰かある。」

狂言「御前に候。」

ワキ「さても山伏達に聯爾を申して、餘りに面目もなく候ふ程に、追つ付き申し、酒を一つ參らせうずるにてあるぞ、汝は先へ行きて留め申し候へ。」

狂言「畏つて候。（舞臺に入りて）如何に申し候。先には聯爾を申して餘りに面目もなく候ふとて、關守の是まで酒を持たせて參られて候。」

シテ「言語道斷の事、やがて御目に懸らうずるにて候。」

（シテ、子方に向ひ默禮、子方立ちて、笛の後を通りて後見座にくつろぐ（强力の體に裝ふ心）シテくつろぎ、ワキの舞臺に入り脇座に着座して後、立ち、橋掛一の松にて）

シテ「げに〳〵是も心得たり。人の情の盃に、浮けて心を取らんとや、是に付きてもなほ〳〵人に、謠『心なくれそ呉織（くれはとり）、地『怪しめらるな面々と、辨慶に諫められて、此山陰の一宿りに、*さらりと圓居して、所も山路の、菊の酒を飲まうよ。

以下シテ立ち形種々あり。

シテ『おもしろや山水に、地『おもしろや山水に、盃を浮べては、流に引かる曲水の、*手まづさへぎる袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。本より辨慶は三塔の遊僧、舞延年の時の和歌、是なる山水の、落ちて巖に響くこそ、地『鳴るは瀧の水。

シテ「たべ醉ひて候ふ程に、先達御酌に參らうずるにて候。」

*シテ　舞臺に入り下に居。

*磯石遲來心驚待、乘流遊過手先遲。（御詠集、春繁流送羽熊、宮雅親）

ワキ「さらばたべ候ふべし。とてもの事に先達一さし御まひ候へ。」

シテ「承り候。」

地『鳴るは瀧の水、

男舞

シテ『鳴るは瀧の水、地『日は照るとも絶えずとうたり、絶えずとうたり、とくとく立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々、暇申してさらばよと、笈をおつ取り肩に打ち懸け、虎の尾を履み、毒蛇の口を遁れたる心地して、陸奥の國へと下りける。

ツレ皆立ち、子方を先きに立て、早足に幕に入る。

邯鄲男（男面、邯鄲及び高砂等神能の後シテ）

景清（青目面）

增（女面、熊野松風のシテ、其の他女物中品位あるもの）

山姥（鬼女面）

# 邯鄲

囃子方幽に着きて後、大屋臺を脇座に出だす。狂言方一人(女姿)枕を持ちて出で、これは唐土邯鄲の里に住居する民なるが、古へ仙法を行ふ人を宿したるに、邯鄲の枕と申すをたまはりたり、此枕を召してまどろめば、夢のうちにこし方行く末の悟を開く枕なりとてその由來を述べ、「今日もまた御旅人のお泊りあらば此方へと申候へ」とて枕を臺の上におき狂言座にくつろぐ。次第の囃子のうちにシテ左に水晶の數珠、右に唐團扇を持ちて出で

シテ 面邯鄲男、黑頭、着附厚板、半切、法被、腰帶、掛絡。

シテ次第『浮世の旅に迷ひきて、〳〵、夢路をいつと定めん。

シテ「是は蜀の國のかたはらに盧生といへるものなり。われ人間にありながら佛道をも願はず、たゞ茫然と明かし暮らすばかりなり。誠や楚國の羊飛山に、貴き知識のましますよし承り及びて候ふ程に、身の一大事をも尋ねばやと思ひ、只今羊飛山へと急ぎ候。」

道行『住み馴れし、國を雲路のあとに見て、〳〵、山又山を越え行けば、そこともなき旅衣、野暮れ山暮れ里くれて、名にのみ聞きし邯鄲の、里にもはやく着きにけり。〳〵。

シテ「急ぎ候程に、是ははや邯鄲の里に着きて候。未だ日は高く候へども

此所にて旅宿せうずるにて候。」

橋掛の方に向ひ狂言に對し、一夜の宿を借り度き旨の掛合あり。狂言「まづかうかう御通り候へ」とて床几を大小前に置く、シテ之に掛る。狂言いづくよりいづ方に行く旅人なるかを問ふ、シテ旅の理由を答ふ。狂言邯鄲の枕といふものあれば一見し給へとすゝめ、シテ「さらば立ち越え一睡見うずるにて候」狂言「さあらば妾は其間に粟の御臺を申し付けうずるにて候」とて狂言座にくつろぐ。シテ靜に臺に上り、枕をとくと見て

シテ「さてはこれなるが聞き及びにし邯鄲の枕なるかや、是は身を知る門出の、世のこゝろみに夢の告、謠『天のあたふる事なるべし。

謠『一村雨の雨やどり。地『一村雨の雨やどり、日はまだ殘る中宿に、假寢の夢を見るやと、邯鄲の枕に伏しにけり。〳〵。

唐團扇を顏にあて、仰向けになりて臥す。謠の切れぬ内にワキ出で、扇にて臺を二つたゝく、シテ起き直る。トモ二人輿の作物を持ち出でワキの後に控ふ。

ワキ「如何に盧生に申すべき事の候。」

ワキ　勅使、着附　臥板、大口、側次、腰帶、扇。　トモ　輿丁、もさどう。

シテ「そもいかなる者ぞ。」

ワキ「楚國の帝の御位を、盧生にゆづり申さんとの、勅使是まで參りたり。」

シテ「思ひよらずや王位には、そも何ゆゑにそなはるべき。」

ワキ「是非をばいかではかるべき。御身代をもち給ふべき、其瑞相こそましますらめ、はやはや輿にめさるべし。」

シテ『こはそも何とゆふ露の、光りかゞやく玉の輿、乘りも習はぬ身のゆくへ。ワキ『かゝるべきとは思はずして、シテ『天にもあがるワキ『こゝちして、地『玉の御輿にのりの道、〳〵、榮花の花も一時の、夢とはしら雲の、上人となるぞ不思議なる。

來序の囃子にて子方ワキツレ三四人出で舞臺に居ならぶ、宮殿內月卿雲客の心

地『有難の氣色やな、〳〵、もとより高き雲の上、月も光はあきらけき、雲龍閣や阿房殿、光も滿ち〳〵て、げにも妙なる有樣の、庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戶を、出て入る人までも、光を飾るよそほひ[二]は、誠や名に聞きし、寂光の都喜見城の、たのしみもかくやと、思ふばか

(一)シテ臺を下り正面に向く、トモ輿の屋根をさしかく
(二)輿を引き、ワキ、トモ樂屋に入る、宮殿に着したる心

りの氣色かな。千顆萬顆の御寶の、數をつらねて捧物、千戸萬戸の旗のあし、天に色めき地にひゞく、籟の聲も夥し、〳〵。シテ『東に三十餘丈に、地『白金の山を築かせては、黃金の日輪を出だされたり。シテ『西に三十餘丈に、地『こがねの山を築かせては、しろかねの月輪を出だされたり。たとへばこれは、*長生殿の內には、春秋をとゞめたり、不老門の前には日月遲しと言ふ心をまなばれたり。

ワキツレ（大臣）シテの前に手を突きて

大臣『如何に奏聞申すべき事の候。御位に卽き給ひては早五十年なり。然らば此仙藥をきこしめさば、御年一千歲まで保ち給ふべし。さる程に天のこんづやかうがいの盃、これまで持ちて參りたり。

シテ『そも天のこんづとは、大臣『是れ仙家の酒の名なり。シテ『かうがいの盃と申す事は、大臣『おなじく仙家の盃なり。シテ『壽年は千世ぞときくの酒、大臣『榮花の春も萬年、シテ『君も豐かに、大臣『民さかへ、地『國土安全長久の、〳〵、榮花もいやましに、なほ喜びは增り草の、菊の盃とり〴〵に、いざ

*長生殿春秋皆不老門前日月遲（朗詠集、雜、祝、天子萬年、慶滋保胤）

ワキツレ　大臣、立烏帽子、著附厚板、白大口、狩衣、腰帶、扇。



や飲まうよ。

子方扇をひらきて酌に立ち、シテ唐團扇にて之を受く。

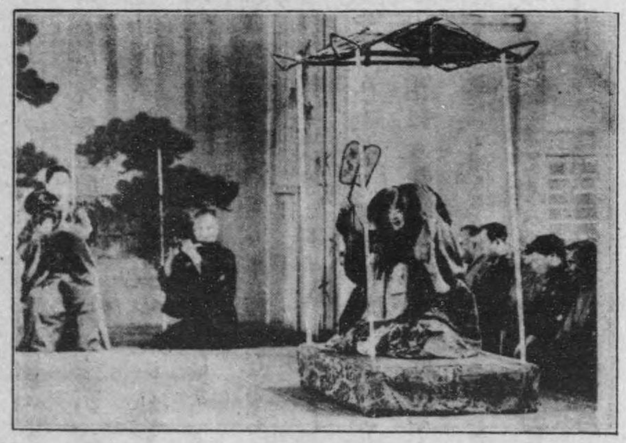
シテ『めぐれや盃の、地『(一)めぐれや盃の、流れは菊水の、(二)流に引かれて疾く過ぐれば、手まづ遮る菊衣の、花の袂をひるがへして、差すも引くも光なれや、盃の影の、めぐる空ぞ久しき。子方『わが宿の、地『(三)我宿の、菊の白露今日ごとに、幾世つもりて淵となるらん。よも盡きじよも盡きじ、藥の水も泉なれば、汲めども〳〵、いやましに出づる菊水を、飲めば甘露もかくやらんと、心も晴れやかに、飛び立つばかり有明の、夜晝となき樂しみの、榮花にも榮耀にも、げに此上やあるべき。

シテ法被の右肩を脫ぎ（興に乘じたる心）樂を舞ふ。

シテ、ワカ『いつまでぞ、榮花の春も常磐にて、地『なほ幾久し有明の月。シテ『月人男の舞なれば、雲の羽袖をかさねつゝ、よろこびの歌を、歌ふ夜もすがら、地『うたふ夜もすがら、日は又出でて明らけくなりて、夜かと思へば、シテ『晝になり、地『晝かと思へば、シテ『月又さやけし。地『春の花さけば、

(一) 次の謠の中子方の舞あり、酒宴藝樂の心。
(二) 磯石遲來心緩待　乘流遲過手先遲（朗詠集、春、緊流送羽觴、管雅現）
(三) わが宿の菊の白露今日ごとに幾夜積りてふちと成らむ（拾遺、秋、元輔）（詞書に、三條のきさいの宮のもぎ侍りける屏風に九月九日の所）

シテ『紅葉も色こく、地『夏かと思へば、シテ『雪もふりて、地『四季折々は目の前にて、春夏秋冬萬木千草も一日に花さけり。面白や不思議やな。



（一）シテ臺の上に立つ
（二）子方ワキヅレ切戸より樂屋に入る
（三）臺に飛び上り疑る

臺に腰かけ茫然たる心

かくて時過ぎ頃されば、〳〵、五十年の榮花も盡きて（一）誠は夢の内なれば（二）皆消え〳〵と失せ果てゝ（三）有りつる邯鄲の枕の上に、眠の夢はさめにけり。

狂言扇にて臺を敲き栗の御臺の出來たる由をいふ。シテ靜に起き直り安座し

シテ『盧生は夢さめて、地『盧生は夢さめて、五十の春秋の、榮花もたちまちに、たゞ茫然と起きあがりて、シテ『さばかり多かりし、地『女御更衣の聲と聞きしは、シテ『松風の音となり。地『宮殿樓閣は、シテ『ただ邯鄲の假の宿、地『榮花のほどは、シテ『五十年、地『さて夢の間は粟飯の、シテ『一炊の間なりや測りがたしや。シテ『つら〳〵人間の有樣を案ずるに、地『百年の歡樂も、命終れば夢ぞかし。五十年の榮花こそ、身の爲には是までなり。榮花の望も齡の長さも、五十年の歡樂も、王位になれば是までなり。げに何事も一炊の夢、シテ『南無三寶南無三寶、地『よく〳〵思へば出離を求むる、知識はこの枕なり。げに有難や邯鄲の、〳〵夢の世ぞと悟り得て、望かなへて歸りけり。

## 文相撲

大名（眞中にて名乘る）『八幡大名です。かやうに過は申せども、使ふ者は只一人。一人にては人が使ひ足らぬ程に、新座の者を大分抱へようと存ずる。まづ、太郎冠者を呼出して申しつけよう。やい〳〵、太郎冠者居るか。冠者『はあ。大名『ゐたか。冠者『御前に居ります。大名『念なう早かつた。

大名シテ、素袍、烏帽子、ちひさ刀、冠者、中上下、腰帶。

文相撲

汝を呼出す事、別の事でない。汝一人では人が使ひ足らぬ、新座の奉公人を大分抱へようと思ふが、何とよかろか。冠者「これは、中々ようござりましよ。大名「何程おいてよかろ。冠者「されば、何程がようござりましよぞ。大名「やあ、千人程おかう。冠者「それは大分の人でござる。置所がござるまい。大名「いや、廣い野山へ追ひ放しておかうまで。冠者「中々、野山において奉公はいたしませぬ。大名「それなら、くわつと減さう。もの程おかう。冠者「何程でござる。大名「五十程おかう。冠者「それでも、勝手の堪忍はつゞきますまい。大名「堪忍といふは、食物(くはもの)の事か。冠者「中々、左樣でござる。大名「深山にある水を飲ましておけ。冠者「いや〳〵、水など食べましては、御奉公はいたしませぬ。大名「それなら、これも、もそつと減さう。づんと減して二人おかう。冠者「迚ものことに、も一人減したらようござろ。大名「いや〳〵。汝ともに二人ぢや。冠者「すれば新座者は一人で御座る。大名「中々左樣ぢや。冠者「や、これが一段ようござりましよ。大名「其の義なら、汝は上下の街道へ行て、よささうな者が來たらば、抱へてこい。冠者「畏つてござる。大名「最早行くか。冠者「かう參ります。大名「やがて戻れ。冠者「はあ。大名「えい。冠者(囃)「はあ。やれ〳〵、急な事を申付けられた。先街道へ參り、能からう者が參つたら、抱へて參らうと存ずる。誠に、只今迄は某一人で、殊の外苦勞いたしてござるが、新座の者が參つたらば、樂を致すでござらう。參る程にこれが街道ぢや。先此所に待つて居ようと存ずる。（取手名乘）罷出たるものは、東國方の者でござる。某、今に上方を見物致さぬほどに、此度都へ上り見物致し、またよささうな所もあらば、奉公致さうと存ずる。まづ、そろ〳〵參らう。誠に人々の仰せらるゝは若い時旅をせねば老いての物語が無いと申さるに依つて、俄に思ひ立つてござる。冠者「やあ。似合はしい者が參つた。言葉をかけて見よう。なう〳〵、これ〳〵。取手「こちの事か、何事でござる。冠者「そなたは、どれからどれへ行く人ぞ。取手「私は奉公が望で、都へ上ります。冠者「夫は幸ぢや。身共の頼うた人は大名ぢや、これへ肝入れて出してやろ。取手「それは忝うござる。御肝入られて下され。冠者「其の義なら、只今同道致さう。さあ〳〵、おりやれ〳〵。取手「參ります。冠者「なう〳〵、何ぞ其方に藝はないか。取手「されば、斯樣のものも藝になりましよか。冠者「何でおりやる。取手「弓、鞠、庖丁、碁、双六、馬の伏せ起し、やつと參つたを覺えました。冠者「扨も〳〵萬能の人ぢや、其の通り申したらば、お氣に入るであらう。さあさあ、早うおりやれ。やあ、なにかと申すうちに、これぢや。そなたを同道した通り申さう、それにて待ちやれ。取手「心得ました。冠者「頼うだお方、ござりますか。太郎冠者が歸りました。大名「やあ、太郎冠者が戻つたさうな。太郎冠者、戻つたか〳〵。冠者「ござりまするか、〳〵。大名「戻つたか。冠者「只今歸りました。大名「やれ〳〵、骨折や〳〵。何と、新座の者を抱へて來たか。冠者「成程、抱へて參りました。大名「どこもとに居るぞ。冠者「御門外に待せておきました。大名「それなら、物は初からが大事ぢや。彼奴が聞く樣に過を云はう程に、汝は色々にこたへ。冠者「畏まつてござる。大名（大聲に）「やい〳〵、太郎冠者は居るか。冠者「はあ。大名「床几を持つてこい。冠者「畏つてござる。お床几でござる。大名（小聲にて冠者に）「何と、今の聲を聞かゝなあ。冠者「中々、承りましよ。

大名「それなら、あれへ行ていはうは、頼うだ人、只今廣間へ出られた、あれへ出て御目見えをしやれ。お目に入つたら、其の儘御見參であろ。又御氣に入らずば逗留があらうというて、これは汝が云分にして、彼奴に深う思はせ。冠者「畏つてござる。なう〳〵、をりやるか。取手「中々、これに居ります。冠者「頼うだお方、只今廣間へ出でさせられた。あれへ出てお目見えをしやれ。御目が參つたら、當分に御見參であろ。又御氣に入らずば、逗留のある事があらう。左樣心得て出やれ。取手「心得ました。大名「やい〳〵、太郎冠者、あるかやい。冠者「はあ。大名「侍衆にたゝ居られうより矢の根を磨かれといへ。冠者「はあ。大名「また仲間共には、このごろ奥から引かせた、百匹斗の馬の湯洗をさせい。冠者「はあ。大名「今日は天氣がよい、若い衆の鞠をなされう程に、かゝりへ水をまかせておけ。冠者「はあ。新座の者でござる。(取手大名に禮し橋掛へ下がる)大名「彼奴か。冠者「中中。大名「とつと利根さうな奴ぢや。さりながら、見たと違うて鈍な奴もあるものぢや。何ぞあれに藝はないか、問うて來い。冠者「夫は路次で尋ねましたれば、如樣なものも藝になりましよかと申しまする。大名「何ぢや。冠者「弓、鞠、庖丁、碁、双六、馬の伏起、やつと參つたを覺えて居ると申します。大名「あの、彼奴が。冠者「中々。大名「それは萬能の奴ぢや。さりながら、其の中に何ぞ得てゐる藝はないか、問うて來い。冠者「畏つてござる。なう〳〵、そなたの藝の中に、何ぞ得てゐる事はないかと仰せられるゝわ。取手「中にも、相撲をえて取ると仰せられ。冠者「心得た。中にも、相撲をえて取ると申します。大名「何と。相撲を得て取る。冠者「中々。大名「彼奴は、身共に生れ合うた奴ぢや。夫なら相撲を見よう程に、これへ出て取れといへ。冠者「畏つてござる。なう〳〵、相撲を見ようと仰せらるゝ、出て取りやれ。取手「如何にも取りましよ程に、お相手を下されと仰せられ。冠者「心得た。如何にも取りましよ程に、お相手を下されと申します。大名「はて扨、獨出てとれといへ。冠者「畏つてござる。獨とれと仰せらるゝ。取手「いや、獨取りましては、勝負が知れませぬ。お相手を下されとおしやれ。冠者「心得た。獨とりましては、勝負が知れぬ。是非お相手を下されと申します。大名「何と。勝負が知れぬ。これも尤ぢや。それならば、誰と取らせうぞ。風呂をたく道寺ととらせうか。冠者「いや、あれは、年寄りまして取りますまい。大名「最早すねがながれうなあ、やあ、汝とれ。冠者「いや、私はつひにとつた事はござらぬ。大名「やあ、弱い奴ぢや。相撲は見たし相手はなし、是非に及ばぬ、身共がとらうが、取るか、問つてこい。冠者「畏つてござる。なうなう、相撲取も數多ゐれども、折節方々へ遣はされた。夫故、頼うだ人の御取なされうと仰せらるゝわ。とりやるか。取手「中々、お相手に嫌ひはござらぬ、取りましよと仰せられ。冠者「心得た。お相手に嫌はない、取りましよと申します。大名「何と。とらう。扨は彼奴が相撲もしれた。身共に勝つたらば、誰が扶持をせう。勿論まけたらば、尚扶持をせまい。是非に及ばぬ、とらずばなるまい。身拵して出よといへ。冠者「畏つてござる。さあ〳〵、身拵して出やれ。取手「心得ました。大名「やい〳〵、太郎冠者、身拵せい。身拵がよくば出よといへ。冠者「畏つてござる。さあ〳〵、拵がよくば出やれ。取手「心得ました。大名「太郎冠者、行司をせい。冠者「畏つてござる。(二人構へる)

御手ッ。二人「やあ〳〵〳〵。(二人立合ひ大名負ける。取手橋掛に行く)冠者「申し〳〵。何となされましたく〳〵。大名「扨も早い相撲ぢや。やつと云うて手合をするや否や、はつし〳〵と打つてきたれば、眼がくら〳〵とした。何といふ手ぢや。問うて來い。冠者「畏つてござる。なう〳〵、今の手は何といふ手ぢやと仰せらるゝは。取手「只今の手は、坂東方に流行る、目隱と申す手ぢやと仰せられ。冠者「心得た。只今の手は、坂東方にはやる、目隱と申す手ぢやと申します。大名「何ぢや、目隱といふか。冠者「中々。大名「いつぞや伯父者人から來た相撲の書があらう。取つてこい。冠者「畏つてござる。相撲の書でござる。大名「これが書か。書いた物は調法ぢや。なに〳〵。相撲の〳〵。是は何ぢや。冠者「私も讀めませぬ。大名「相撲の書の事でがなあらう。冠者「左樣でござりましよ。大名「なに〳〵、相撲の書の事。一ッ目隱。ちようと打つ、其の時貌をひくべし。やい〳〵、今の時顏をひけばよいもの。冠者「左樣でござる。大名「一ッ。右をもつて左へ廻し。左を以つて右へ廻し。小股にかけてずでいどう。やい〳〵。も一番取らうといへ。冠者「畏つてござる。なうなう、も一番とらうと仰せらゝ。お出やれ。取手「心得ました。大名「太郎冠者、行司せい。冠者「畏つてござる。お手ッ。二人「やあ〳〵〳〵。大名「やあ〳〵。さあ〳〵。勝つたぞ〳〵。冠者「お勝ちなされました〳〵。取手「これ。なう〳〵、太郎冠者どの〳〵。冠者「呼びます。行て參りましよ。大名「いてこい。なるまいと云へ。冠者「何事でおりやる。取手「相撲の手は、數多ござれども、只今の樣に、拳をもつてはらせらるゝ手は、何と申す手ぢや。問うて下され。冠者「心得て居りやる。申しますは、相撲の手は數多ござるが、只今の樣に、拳をもつてはらせらるゝ手は、何と申す手ぢやと申します。大名「あれへ行て云はうは、相撲の手は、碎けば百手にも二百手にも取る。中にも只今の手は、都方にはやる、はつ手はり廻すはり相撲。どうなりとも取たい樣に取れといへ。冠者「畏つてござる。なう〳〵、只今仰せられたをお聞きやつたか。取手「なか〳〵、これで一々聞きました。其の義なら、今一番取りましよと仰せられ。冠者「心得た。其の通り申してござれば、左樣でござるなら、今一番取りませうと申します。大名「何と、今一番取らうといふか。扨は、貧腹を立て居ると見えた。是非に及ばぬ。取らう程にこれへ出せ。冠者「畏つてござる。大名「やい〳〵、太郎冠者。冠者「何事でござる。大名「同じか無用にせいといへ。冠者「畏つてござる。なうなう夫なら取らうと仰せらるゝ。身拵してお出やれ。

同じくは無用にしやれ。取手「いや〳〵。是非共とりましよ。冠者「また私の行司致しましよ。お手ッ。二人「やあ〳〵〳〵。お手ッ。參つたの。(大名負ける)大名「相撲の書。何の役に立たぬものぢや。やあ。おれは未だ爰にをるか。冠者「いや。私は太郎冠者でござる。大名「何の。太郎冠者。お手ッ。

まゐつたの。（小膀とり打ちこかし樂屋へ入る）

ツレ　景清女人丸、面小面、髮、髮帶、著附袴、唐織著流、トモ　從者、素袍上下。

# 景　清

蘗子方座につきて後、藥屋の作物に引廻しをかけて大小前に出だす。此うちにシテ入り居り。次第にてツレ、トモ出て舞臺にて向合ひ謠ふ

ツレ、トモ次第『消えぬ便も風なれば、〳〵、露の身いかになりぬらん。

ツレ『是は鎌倉龜が江が谷に、人丸と申す女にて候。さても我父惡七兵衞景清は、平家の味方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる。いまだ習はぬ道すがら、物うき事も旅のならひ、また父ゆゑと心づよく、二人下歌『思寢の涙かたしく、草の枕露をそへて、いと滋きたもとかな。上歌『相模の國を立ちいでて、〳〵、誰にゆくへを遠江、げに遠き江に旅舟の、三河にわたす八橋の、雲井の都いつかさて、假寢の夢に馴れて見ん。〳〵。



※此處にて引廻し下る中にシテ安座してあり。面景清、沙門帽子、著附厚板、大口、水衣、腰帶、扇。

トモ「やう〳〵御急ぎ候ふほどに、是は早日向の國宮崎とかやに御着きにて候。こゝにて父御の御行方を御尋ねあらうずるにて候。」

ツレ脇座にトモは其次に座す。シテ作り物の内より謠ふ

シテ『松門獨り閉ぢて年月を送り、みづから清光を見ざれば、時の移るをも辨へず。暗々たる庵室に徒に眠り、衣寒暖に與へざれば、膚は髓骨と衰へたり。※地『とても世を、背くとならば墨にこそ、〳〵、染むべき袖のあさましや、やつれはてたる有樣を、我だに憂しと思ふ身を、誰こそありて憐みの、憂きをとぶらふよしもなし。〳〵。

ツレ立ちて作物に向ひ

ツレ『ふしぎやな是なる草の庵ふりて、誰住むべくも見えざるに、聲めづらかに聞ゆるは、もし乞食のありかかと、軒端も遠くみえたるぞや。

シテ「※秋きぬと目にはさやかに見えねども、風の音信いづちとも。」

ツレ『知らぬ迷ひのはかなさを、しばし休らう宿もなし。』

シテ「げに三界は所なしたゞ一空のみ誰とかさして事問はん、又いづちと

※秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる（古今、秋、藤原敏行）

か答ふべき。」

トモ「いかに此藁屋の内へ物問はう。」

シテ「そも如何なるものぞ。」

トモ「流され人の行方や知りてある。」

シテ「流され人にとりても、名字をば何と申し候ふぞ。」

トモ「平家の侍悪七兵衛景清と申し候。」

シテ「げにさやうの人をば承り及びては候へども、本より盲目なれば見る事なし。さもあさましき御有様うけたまはり、そゞろにあはれを催すなり、くはしき事をばよそにて御尋ね候へ。」

トモ「さては此あたりにては御座なげに候。是より奥へ御出であつて尋ね申され候へ。」

とツレに向つて云ひ、二人後見座にくつろぐ。

シテ「ふしぎやな只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば、この盲目なるものゝ子にて候ふはいかに。我一年尾張の國熱田にて遊女と相馴れ一人の子をまうく。女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ、鎌倉亀が江が谷の長に預けおきしが馴れぬ親子の悲しみ、父に向つて言葉をかはす。上歌地『聲をば聞けど面影を、見ぬ盲目ぞ悲しき。名のらで過ぎし心こそ、なか〳〵親のきづななれ。〳〵。

トモ、ツレと共に立ちて橋掛に行き

トモ「いかに此あたりに里人のわたり候ふか。」

幕よりワキ出づ

ワキ「里人とは何の御用にて候ふぞ。」

トモ「流され人の行方や御存じ候。」

トモ「流され人にとりても、いかやうなる人を御尋ね候ふぞ。」

トモ「平家の侍悪七兵衛景清を尋ね申し候。」

ワキ「只今こなたへ御出で候ふ山陰に、藁屋の候ふに人は候はざりけるか。」

トモ「其藁屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ。」

ワキ、里人、素袍上下、鳴。

景清

ワキ「なうその盲目なる乞食こそ、御尋ね候ふ景清候ふよ。（ツレシオル）あらふしぎや、景清のことを申して候へば、あれにまします御事の、御愁傷のけしき見え給ひて候ふは、何と申したる御事にて候ふぞ。」

トモ「御不審尤にて候。何をか包み申し候ふべき、是は景清の息女にてわたり候ふが、今一度父御に御對面ありたきよし仰せられ候ひて、是まではる〴〵御下向にて候。とてもの事に然るべきやうに仰せられ候ひて、景清に引き合せ申されて賜り候へ。」

ワキ「言語道斷、さては景清の御息女にて御座候ふか。まづ御心を靜めて聞しめされ候へ。景清は兩眼しひまし〳〵て、せん方なさに髪をおろし、日向の勾當と名を附き給ひ、命をば旅人をたのみ、我ら如き者の憐みをもつて身命を御つぎ候ふが、昔に引きかへたる御有樣を恥ぢ申されて、御名のりなきと推量申して候。某たゞ今御供申し、景清と呼び申すべし。我名ならば答ふべし、其時御對面あつて、昔今の御物語候へ。こなたへわたり候へ。」

ワキ先きに三人舞臺に入り、作物に面し、ワキは進んで

ワキ調「なう〳〵景清の渡り候ふか、惡七兵衛景清のわたり候ふか。」

と作物の柱をうつことあり。シテ耳を押へて

シテ「かしまし〳〵、さなきだに、故郷の者とて尋ねしを、此仕儀なれば身を恥ぢて、名のらで歸す悲しさ。千行の悲涙袂を朽たし、萬事は皆夢の内のあだし身なりと打ち覺めて、今は此世になき物と、思ひ切つたる乞食を、惡七兵衛景清なんどと、呼ばば此方が答ふべきか。謡『其上我名は此國の、

上歌地『日向とは日に向ふ、〳〵、向ひたる名をば呼

景清

*聾家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼。（言家後集、自詠）

び給はで、力なく捨てし梓弓、昔に歸るおのが名の、惡心は起さじと、思へども又腹立ちや。

シテ下歌「所に住みながら、地『所に住みながら、御扶持ある方々に、憎まれ申す者ならば、ひとへに盲の、杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として、腹あしくよしなき言事、唯ゆるしおはしませ。

シテ『目こそ闇けれど、地『目こそ闇けれども、人の思はく、一言の内に知る者を。山は松風、すは雪よ、見ぬ花の、さむる夢の惜しさよ。さて又浦は荒磯に、よする波も聞ゆるは、夕汐もさすやらん。さすがに我も平家なり、物語はじめて、御慰みを申さん。

杖をさぐり持ちて作物を出でワキに向ひ座す

シテ「いかに申し候。唯今はちと心にかゝる事の候ひて、短慮を申して候ふ、御免あらうずるにて候。」

ワキ「いや〳〵いつもの事にて候ふほどに苦しからず候。又我等より以前に、景清を尋ね申したる人はなく候ふか。」

シテ「いや〳〵御尋ねより外に尋ねたる人はなく候。」

ワキ「あら僞を仰せ候ふや。まさしう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひし物を、何とて御つゝみ候ふぞ、あまりに御痛はしさに是まで御供申して候。（ツレに對し急いで父御に御對面候へ。」

ツレ立ちてシテの側に行き

ツレ「なう自こそ是まで參りて候へ。地『恨めしやはるばるの道すがら、雨風つゆしもを凌ぎて參りたる心ざしも、いたづらになる恨めしや。さては親の御慈悲も、子によりけるかや情なや。（シオル）

シテ『今までは包みかくすと思ひしに、あらはれけるか露の身の、置きどころなや恥かしや。御身は花の姿にて、親子と名のり給ふならば、殊に

我名もあらはるべしと、思ひ切りつゝ過すなり、我を恨みとおもふなよ。（ツレの袖をさぐりとらへ）下歌地『あはれげに古は、疎き人をも訪へかしとて、恨み譏る其むくいに、正しき子にだにも、訪はれじと思ふかなしさよ。（シオル）上歌地『一門の船の内、一門の船の内に、肩をならべ膝を組みて、所せく澄む月の、景清は誰よりも、御座船になくてかなふまじ。一類その以下、武略さまざまに多けれど、名を取揖の船に乗せ、主従隔てなかりしは、さも羨まれたりし身の、麒麟も老いぬれば、駑馬に劣るが如くなり。

ツレ脇座、トモ其次、ワキは地前に座し

ワキ「あら痛はしや先かう渡り候へ。」

ワキ「いかに景清に申し候。御娘後の御所望の候。」

シテ「何事にて候ふぞ。」

ワキ「八島にて景清の御高名の様が聞しめされたきよし仰せられ候。そと御物語あつて聞かせ申させ候へ。」

シテ「是は何とやらん似合はぬ所望にて候へども、是まではるばる來りたる心ざし、あまりに不便に候ふほどに、語つて聞かせ申し候ふべし、此物語過ぎ候はゞ、かの者をやがて故郷へ歸して賜はり候へ。」

ワキ「心得申し候、御物語すぎ候はゞ、やがて歸し申さうずるにて候。」

シテカタリ「いて其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に張つて、たがひに勝負を決せんと欲す。謡『能登守教經のたまふやう、去年播磨の室山、備中の水島鵜越に至るまで、一度も味方の利なかつし事、ひとへに義經が謀いみじきに依つてなり。いかにもして九郎を討たん謀こそ有らまほしけれと宣へば、景清心に思ふやう、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命を捨てば安かりなんと思ひ、教經に最期の暇乞ひ、陸にあがれば源氏の兵、餘すまじとて駈け向ふ。

以下謡に伴ふ形あり

上歌地『景清是を見て、〳〵、物々しやと夕日影に、打物ひらめかいて、切つてかゝればこらへずして、刃向ひたる兵は、四方へばつとぞ逃げにける、遁さじと、シテ謡『さもうしや方々よ、地『さもうしや方々よ、源平たがひに見る目も恥かし、一人を留めん事は案の打物、小脇にかいこんで、な

にがしは平家の侍、悪七兵衛景清と、名のりかけ〳〵、手取にせんとて追うて行く。三保谷が着たりける、冑の鍬を、取りはづし取りはづし、二三度逃げのびたれども、思ふ敵なれば遁さじと、飛びかゝり冑をおつとり、えいやと引くほどに、鍬は切れて此方に留れば、主は先へ逃げのびぬ。遙に隔てゝ立ち歸り、さるにても汝おそろしや、腕の強さと言ひければ、景清は三保の谷が、頸の骨こそ強けれと、笑ひて左右へのきにける。

（一）シテ　杖持ちて立ち
ツレ、トモ、ワキも立つ
（二）シテ、ツレの鍬掛の方に来かゝるに行きあたり、手を肩にかく袂別の心。

謡切れにて、ツレの方に向ひ、正面に直し

キリ地『むかし忘れぬ物がたり、おとろへはてゝ心さへ、亂れけるぞや恥かしや、此世はとても幾ほどの、命のつらさ末近し、はや立ち歸り亡き跡を、弔ひ給へ盲目の、くらき所の燈、あしき道橋と頼むべし、さらばよ留る行くぞとの、只一聲を聞き殘す、これぞ親子の形見なる。〳〵。

（一）
（二）

ツレ先にトモ、ワキ幕に入りシテ一人殘りシオリ留め。

## 布施ない

僧、シテ　頭巾、袈裟、衣、數珠持つ。

僧白「これは當寺の住僧でござる。今日は誰どのと申方へ常齋に參る筈でござる。參らうと存ずる處に、又或初めての御方から參つてくれいと仰せられ、餘儀なうてこれへ參り、只今歸りました。常齋の事でござる、定めて待兼てござらう程に、只今からなりとも參り、勤ばかりなりと致して歸らうと存ずる。又これへ參れば、定めて鳥目十疋づつの布施物を下さるゝ、一つは此下心もござる。先そろ〳〵參らう。誠に思ふやうにならぬ世のなかでござる。何方ぞを非時にすれば好うござるに、丁度貧僧の重齋と申すがこれでござる。參る程にこれぢや。物もう。案内もう。

施主、アト、長袴、小刀。

主「表に案内とある。どなたでござる。僧「いや私でござる。施主「やあお住持樣でござるか。好うこそ御出なされました。今朝は待兼て居りました。僧「さうでござらう。私も常齋の事なり。參らうと存ずる處に、或初ての御方から、是非とも齋に參つてくれいと仰せられて、餘儀無うこれへ參り、只今歸りました。定て待兼てござらうず、遲なはつたれど、せめて勤ばかりなりと致して歸らうと

布施ない

存じ參りました。施主「ようこそ御出なされました。御勤をなされてくだされ。先斯う御通りなされませ。僧「心得ました。通りましよ。申し〳〵こなたには何時參つても持佛堂を綺麗にして置かせらるゝ、奇特な事でござる。施主「いや〳〵左樣にもござりませぬ。僧「さらば御勤をはじめましよ。（經をよみて）如是我聞一時佛在須菩提王。三千大千世界。やあいつぞやは見事な花を下されました。施主「されば進ぜましたが、御役に立ちましてござるか。僧「折節寺に客がござつて、佛前にたてましたれば、扨も見事な花ぢやと云うて、皆褒ものでござつた。施主「それは役に立ちまして滿足に存じます。僧（經をよむ）「さらや〳〵。佛說功德布施息災延命。やあ彼の花は庭前にござるか。またどれからぞ貰はせられたか。施主「いや私の庭前にございます。僧「それなら彼の花の種を貰うて植ゑましよ。施主「いかにも進ぜましよ。僧「必ず忘れさせらるゝな。施主「心得ました。僧「南無きやらたんのふ、とらや〳〵〳〵。最早勤をば仕舞ました。かう參ります。（殘り惜しげにし）ちと寺へも御出なされ。施主「畏つてござる。參りましよ。僧「さらば〳〵。施主「好うござりました。僧（獨白）「是は如何な事。お布施の沙汰が無い。忘れられたものであらう。但し今日は遥う參つたに依つて、くれられぬか知らぬ。いや〳〵此やうな事は、必ず例になりたがるものぢや。教化に事寄せて取つて參らう。（小戻りして）申し〳〵ござるか。施主「やあ。これはまだお歸りなされませぬか。僧「いや最早歸りますが、何時ぞは足下に教化を致さうと存じますけれど、終に教化致した事も御ざらぬ。何と今日御暇ではござらぬか。施主「なか〳〵暇でござる。



忝なうござる、教化なされて下されませ。僧「それならまづ通りましよ。施主「御通りなされませい。僧「扨教化と申して、別して格別な事もござらぬ。先人間の果敢ない事を申さば、電光、朝露、石の火、風の前の燈火、朝顏の花などにも喩へおかれてござる。朝顏の花と申す物は御存じでござらう、早朝に開き、日の出れば凋み、夕にははらりと落る果敢ない物で御ざる。施主「中々左樣でござります。僧「まだ朝顏の花は朝開け夕を持つ樂みもござる。人間の果敢ない事を申さば、出る息、入る息を待たぬ世の中でござる。果敢ない事でござる。施主「左樣でござります。僧「又佛說にも傳法せんと欲せば、供佛、施僧、捨身を專とせよ。雲となり雨となる不晴〳〵の時、と說せられた。斯う申しては合點が參るまい。これを一々和げて申す時は、傳法せんといふは、よき法を傳へんと思はば、佛に佛供を供へ。施僧と申して我等如きの貧僧に、何でも施すを施僧と申す。又捨身を專にせよと云ふは、身を捨つると書いた字ぢや。然う云うて、此身を淵河へ持つて行て捨るでは無い。唯世を厭ふと厭はぬ事ぢや。後世の事ならば身も命も惜ず、財寶も擲つて後世を願へといふ事でござる。又雲となり雨となる、これは世間にある事ぢや。或は只今までこれを彼の人に何程やらうと思ふたを、不圖惜いと思うてやらぬ心が出來る。其惜いと思ふ心の出來た所が、晴天に叢雲のかゝつたやうに雲となり雨となりでござる。施主「尤でござります。僧「何と合點がいきましたか。施主「なか〳〵合點致しました。僧「又不晴〳〵の時と申すは、晴れやらず晴れやらぬ時と云ふ事でござる。唯今も申す如く、彼の遣る物はさらり〳〵とはれやり。又取る物も

布施ない

さらり〳〵と取つて、兎角晴れやつたが好うござる。又先の貰ふ者の身になつて見たがようござる。いつも物を何かくれらるゝが、今日は忘れられたか、但し惜いと思うてかと、心に千萬の罪を作る。すれば大きな咎ぢや。其咎は作る者の咎ではござらぬ。いつもやる物をやらぬに依つてとやかうと作る故、皆其やらぬ者の科になります。兎角やる物はさらり〳〵と晴やらしやれ。

施主「畏つてござる。僧「先敎化と申すもこれまでででござる。又寺へも御出なされ。重ねて敎化致しましよ。合點が參つたの。施主「なか〳〵合點致しました。僧「合點が行けばようござる。さらば斯う參らう。なう〳〵不圖思ひ出した。或歌にもござる。あふ時は、語りつくすと思へども、別れとなれば、殘る言の葉、と申して。遇時には忘れて居て、必ず別れになれば、何を云はうもの、いや物を遣らう物と思ふものぢや、何も忘れさせられた事はござらぬか。施主「いや〳〵何も忘れは致しませぬ。最早御歸りなされますか。僧「さらばでござる。施主「ちと御酒でも參つてござりませぬか。僧「はて扨足下は氣を付けさうな事には付けはせいで、身共がどこに酒を飲ます。施主「誠に參らぬを忘れました。僧「最早參る。施主「ござりますか。好うござつた。（間狂言）「はあ、これは如何な事。今の程に手を執つて引廻はす樣に云うても合點しられぬ。何とせう。合點しました〳〵と、あれは何を合點した知らぬ。扨も是非も無い事かな。いや〳〵最早思ひ切らう。誠に受こひぬればこんり致す。受こはぬ時は長く生死に落る。彼の十疋の布施物を二つに押切り、大海へさらりさらりと投げ、無有も無も無うして行ぬるに、何の行かれぬ事があらう。あゝ由無い事をくどくど思うた事かな。（といひて一度まはる）往なう〳〵とは思へど、又彼の十疋の布施物を取ると取らぬは、愚僧が身の上では大分の違ぢや。何とぞして取りたいが、やあ、思ひ付けた。方便の以て取らう。（裝束をふところにかくし小戻り）もうし〳〵ござるか。はて不思議な事かな。施主「やあ、まだ歸らせられぬか。何ぞ見えませぬか。僧「されば不思議な事でござる。最前敎化を致す時、私は裝束をかけて居ましたとも覺えます。又とつて下に置いたとも覺えますが、もし跡にはござりませぬか。施主「されば存じませぬ。尋ねませう。僧「いや〳〵。尤私の裝束には印がござる。出たらば後から持たして下され。他所から歸つて竿の端に掛けて置きましたれば、鼠が丁度錢の周り程喰ひました。それを小僧が十疋の布施物を、あちらへふせやり、こちらへふせ起し致しました。これがしるしでござる。いつそ此穴をふせつかう、ふせ縫に致さうと存じました。今につきも致さぬ。出ましたら後から持たして下され。最早斯う參る。施主「もうし〳〵、夫に付。ちと用がござる。まづ待たせられ。僧「心得ました。（施主間白）「やれ〳〵、いつも十疋の布施物を遣します。之を忘れてやらぬに依り、何かと云うて歸らるゝ、遣さうと存ずる。もうし〳〵。僧「何事でござる。施主「忘れた事がござる。いつも進ぜます布施物を、はつたと忘れました。取つて歸らせられて下され。僧「忘れたと仰せらるゝはこれでござるか。施主「なか〳〵。僧「はて扨こなたは律義な。それを今日取らぬと申して何と存じましよ。重ねてついでもござらう。最早歸ります。施主「いやいや進ぜねば氣にかゝります。是非共取つてござれ。僧「いや〳〵何程仰せられても今日は取らない

れぬ事がござる。施主「夫は如何した事でござる。僧「最前から教化を致さうの、袈裟が見えませぬのと申して歸つたは、此布施が欲しさにと思召すまへもござる。どうあつても取られませぬ。施主「いや〳〵是非共に。僧「いや〳〵こなたへ預けます。施主「いやどうでも取つてござれ。（とかくいひて布施をふところに押入るゝ時、袈裟を取出す）はあ、もうし〳〵。これ袈裟が出ました。僧「はあ、扨も目出たい事がござる。施主「何事でござる。僧「御布施を下されたれば、袈裟まで出ました。施主「何のやくたいも無い事。とつとゝござれ。僧「はあ、面目もござらぬ。なう〳〵恥かしや〳〵。

# 熊野

名宣笛にてワキ太刀持ちたるトモを從へて出で、舞臺に入り謡ふ

ワキ「是は平の宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば熊野と申し候。久しく都にとゞめおきて候ふが、老母のいたはりとて度々いとまを乞ひ候へども、此春ばかりの花見の友とおもひ留めおきて候。いかに誰かある。」

ワキ　平宗盛、黒鳶折烏帽子、著附厚板白大口、長絹又は狩衣、腰物、扇。

トモ　從者、著附無地裏斗目、素袍上下、小刀、太刀持つ、扇。

トモ「御前に候。」

ワキ「熊野きたりてあらば此方へ申し候へ。」

トモ「畏つて候。」

ワキ座に行き床几、トモは笛座の上に行き着座。次第にてツレ出で舞臺に入り謡ふ

ツレ次第『夢の間をしき春なれや、〳〵、咲く頃花を尋ねん。是は遠江の國池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候。

ツレ「さても熊野ひさしく都に御入り候ふが、此程老母の御いたはりとて、度々人を御のぼせ候へども、更に御下りもなく候ふほどに、此度は朝顔が御むかへにのぼり候。」

道行『此程の、旅の衣の日もそひて、〳〵、幾夕ぐれの宿ならん、夢も數そふ假枕、明かし暮らして程もなく、都に早く着きにけり。〳〵。

ツレ「急ぎ候ふ程に、是は早都に着きて候。是なる御内が熊野の御入り候ふ所にてありげに候。まづ〳〵案内を申さばやと思ひ候。」

橋掛に行き幕の方に向ひ

ツレ　朝顔、面小面髪、髪帶、著附箔、唐織著流、文箱中。

ツレ「いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が参りて候ふ、それ〳〵御申し候へ。」

ツレ後見座にくつろぐ。アシラヒ鼓にてシテ出て、幕際三の松邊にて

シテ『草木は雨露のめぐみ、*養ひ得ては花の父母たり、況んや人間に於てをや。あら御心もとなや何とか御入り候ふらん。

ツレ立ちて一の松の所にてシテに向ひ

ツレ「池田の宿より朝顔がまゐりて候。」

シテ「なに朝顔と申すか、あらめづらしや。さて御いたはりは何と御入りあるぞ。」

ツレ「以ての外に御入り候。是に御文の候ふ御覽候へ。」

ツレ文をシテに渡す

シテ「あら嬉しや先々御文を見うずるにて候。（正面向き文を開き見て）あら笑止や、此御文のやうも頼みずくなう見えて候。」

ツレ「左樣に御入り候。」

シテ「此上は朝顔をもつれて参り、又此文をも御目にかけて、御暇を申さうずるにてあるぞ、こなたへ來り候へ。」

文をたゝみ、ツレと入替り舞臺に入り

シテ「誰か渡り候。」

トモ「誰にて渡り候ふぞ。や、熊野の御まゐりにて候。」

シテ「わらはが参りたる由御申し候へ。」

トモ「心得申し候、（ワキに向ひ膝つきて）いかに申し上げ候。熊野の御参りにて候。」

ワキ「こなたへ來れと申し候へ。」

トモ「畏つて候。（立歸りシテに向ひ）此方へ御参り候へ。」

シテ中央に出てワキに向ひ下に居て

シテ「いかに申し上げ候。老母のいたはり以ての外に候ふとて、此度は朝顔に文をのぼせて候。びんなう候へどもそと見参に入れ候ふべし。」

ワキ「なにと故郷よりの文と候ふや、見るまでもなしそれにて高らかに讀

シテ　熊野、面若女、増又は孫次郎にても、髪、髪帶、著附笠、唐織着流、扇。

*養得自爲花父母、洗來寒辨藥君臣、（朗詠集、春、仙家春雨　紀長谷雄）

み候へ。」

シテ正面向き下に居、文を見て

シテ『甘泉殿の春の夜の夢、心を砕く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終なきにしもあらず。末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし二月の頃申しゝ如く、何とやらん此春は、年ふりまさる朽木櫻、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心よわき、老の鶯逢ふ事も、涙に咽ぶばかりなり。たゞ然るべくばよきやうに申し、しばしの御暇を賜はりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世のなかなるに、同じ世にだに添ひ給はずば、孝行にもはづれ給ふべし。唯かへすがへすも命の内に、今一度見まゐらせたくこそ候へどよ。*老いぬればさらぬ別のありといへば、いよ〳〵見まくほしき君かなと、古ことまでも思出の涙ながら書きとゞむ。

讀み了り文をたゝみて下におく、後見片づく。

地『そも此歌と申すは、〳〵、在原の業平の、御身は朝に隙なきを、長岡に住み給ふ、老母のよめる歌なり。さてこそ業平も、さらぬ別のなくもがな、千代もと祈る子の爲と、よみし事こそあはれなれ。〳〵。

シテ「今はかやうに候へば、御暇を賜はり、東に下り候ふべし。」

ワキ「老母の痛はりはさる事なれどもさりながら、この春ばかりの花見の友、いかでか見すて給ふべき。」

シテ『御詞をかへせば恐れなれども、花は春あらば今に限るべからず。是はあだなる玉の緒の、ながき別れとなりやせん、唯御暇を賜はり候へ。

ワキ「いや〳〵左様に心よわき、身に任せてはかなうまじ、いかにも心を慰めの、花見の車同車にて、」『ともに心を慰まんと、地『牛飼車寄せよとて、〳〵、是も思ひの家の内、はや御出と勸むれど心は先に行きかぬる、足よわ車の力なき花見なりけり。

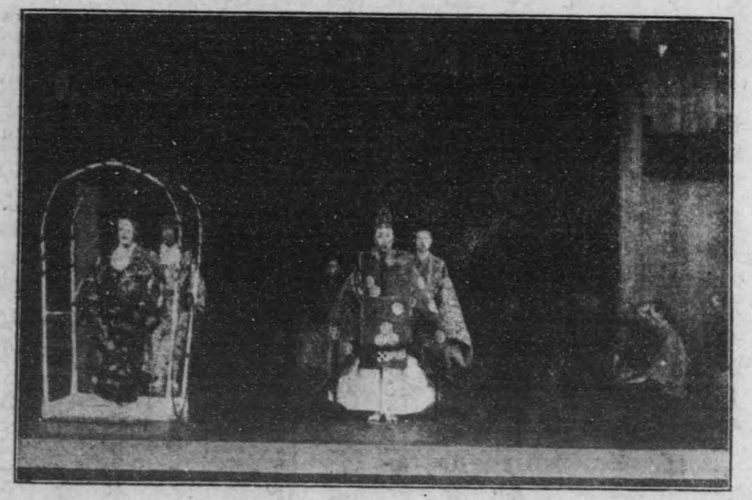
シテ立ち車に乗る。ツレはその後ワキは其左に立つ（皆車中の心）

シテ『名も清き、水のまに〳〵とめくれば、地『河は音羽の山櫻、シテ『東路とても東山、せめて其方のなつかしや。地『春前に雨あつて花の開くる事

*昔男ありけり。身はいやしながら、母たんみこたりける。その母長岡といふ所にすみ給ひけり。子は京に宮づかへしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず、ひとり子にさへありければ、いと悲しうしたまひけり。さるほどにしはすばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、こと事はなくて、「老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよみまくほしき君かな」となんありける。これを見て、馬にも乘りあへずまゐるとて、いといたうちなきて遊すがら思ひける「世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のため」（伊勢物語）

（一）作物、車、見附柱よりに出だす。

（二）花ちれる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりにけり（古今、夏、清原深養父）



早し。秋後に霜なうして落葉遲し。山外に山あつて山盡きず、路中に道多うして道きはまりなし。シテ『山青く山白くして雲來去す。地『人樂しみ人愁ふ、是れ皆世上の有樣なり。下歌地『誰か*言つし春の色、げに長閑なる東山、上歌地『四條五條の橋の上、〳〵、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を連ねて行末の、雲かと見えて八重一重、さく九重の花ざかり、名に負ふ春のけしきかな。〳〵。ロンギ地『河原おもてを過ぎゆけば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む。シテ『觀音も同座あり、闡提救世の方便あらたに、たちちねを守り給へや。地『げにや守りの末すぐに、賴む命は白玉の、愛宕の寺も打ち過ぎぬ。六道の辻とかや。シテ『げにおそろしや此道は、冥途に通ふなるものを、心細鳥邊山、地『煙の末も薄霞む、聲も旅雁の横たはる、シテ『北斗の星の曇りなき、地『御法の花も開くなる、シテ『經書堂は是かとよ。地『其たらちねを尋ぬる、子安の塔を過ぎ行けば、シテ『春の隙行く駒の道、地『はや程もなく是ぞこの、シテ『車宿り、地『馬留め、こゝより花車、*おりゐの衣播磨潟、飾磨の徒歩路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。

後見、車を幕より樂屋に引く。

ワキ「いかに誰かある。」

トモ「御前に候。」

ワキ「熊野はいづくにあるぞ。」

トモ「いまだ御堂に御座候。」

熊　野

*誰言春色從東到
霧暖南枝花始開
（朗詠集、春、尋春色　菅原文時）

*シテ、車を下り正面先に出で合掌、佛前祈誓の心。

ワキ「何とて遅なはりたるぞ、急いでこなたへと申し候へ。」

トモ「畏つて候。いかに朝顔に申し候。はや花の下の御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。其よし仰せられ候へ。」

ツレ「心得申し候。（シテに向ひ）いかに申し候。はや花の下の御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。」

シテ「何と早御酒宴の始まりたると申すか。」

ツレ「さん候。」

シテ「さらば参らうずるにて候。」

シテ立ち、仕手柱の方へ行き見廻して

シテ「なう〳〵皆々近う御参り候へ。あら面白の花や候。今を盛と見えて候ふに、何とて御當座などをも遊ばされさふらはぬぞ。地『實にや思ひ内にあれば、色外に顯はる。地『よしやよしなき世の習ひ、歎きても又餘りあり。シテ『花前に蝶舞ふ紛々たる雪、地『柳上に鶯飛ぶ片々たる金、花は流水に隨つて香の來る事疾し、鐘は寒雲を隔てゝ聲の至る事遲し。

*シテ、中央に行き下に居る。

（舞クセ）クセ『清水寺の鐘の聲、祇園精舍をあらはし、諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色、娑羅雙樹のことわりなり。生者必滅の世のならひ、實にためしある粧ひ、佛も元は捨てし世の、なかばは雲に上見えぬ、鷲の御山の名を殘す、寺は桂の橋柱、(一)立ち出でて峯の雲、花やあらぬ初櫻の、祇園林下河原、シテ『南を遙かにながむれば、地『大悲擁護の薄霞、熊野權現の移ります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋又、花の春は清水の、(二)唯たのめ頼もしき、春も千々の花盛り、シテ『山の名の、音羽嵐の花の雪、地『深き情を人や知る。

シテ扇を開き酒を汲みてワキの前に行き酌

シテ『妾御酌にまゐり候ふべし。」

ワキ「いかに熊野、一さし舞ひ候へ。」

地『深き情を人や知る。

シテ立上り、中の舞。舞留にて脇正面をながめ

シテ「なう〳〵俄に村雨のして花の散り候ふは如何に。」

（一）これよりシテ立ちて舞ふ。

（二）なほ頼めしめぢが原のさしも草我世の中にあらん限は（新古今、一七頁出）

ワキ「げに〳〵村雨の降り來つて花を散らし候ふよ。」

シテ「あら心なの村雨やな。*春雨の、地『降るは涙か、降るは涙か櫻花、散るを惜しまぬ人やある。

*春雨の降るは涙かさくら花ちるを惜しまぬ人しなければ（古今、春、大伴黒主）

扇に落花を受けて惜しむ心、短冊を左の袂より出だし扇の要の所を筆の穂先にして認める形。扇ひらき短冊を上にのせてワキに渡す。

ワキ「よしありげなる言葉の種取り上げ見れば、（短冊を見て）いかにせん都の春も惜しけれど、シテ『なれし東の花や散るらん。

ワキ「げに道理なりあはれなり。早々暇とらするぞ、東に下り候へ。」

シテ『何御いとまと候ふや。

ワキ「中々の事、とく〳〵下り給ふべし。」

シテ『あら嬉しや尊やな、是れ觀音の御利生なり。是までなりや嬉しやな。



地『是までなりや嬉しやな。かくて都に御供せば、またもや御意のかはるべき、たゞ此まゝに御いとまと、*ゆふつけの鳥が鳴く、東路さして行く道の、やがて休らふ逢坂の、關の戸ざしも心して、明け行く跡の山見えて、花を見すつる雁金の、それは越路我はまた、東に歸る名殘かな〳〵。

*ワキに會釋して立ち

扇をかざし廻り拍子踏み留め。

## 梟山伏

兄、中上下、腰帶

山伏、シテ、兜巾、篠懸、水衣、中袴、

兄（名乘る）「罷り出でたるものは、此のあたりに住居する者でござる。某弟を一人持つてござるが、此の中、山へ柴刈にやつてござれば、何と致したやら、唯うつかりとなり、鳥の鳴く樣な事を時々申す。何とも氣の毒な事でござる。夫につき、爰に私に目を懸けらるゝ先達がござる。今日はこれへ參り樣子を申して、物の魅いた事ならば、祈つてのけて貰はうと存ずる。先急ぎ參らう。白扇も〳〵、氣の毒でござる。參る程にこれぢや。案内申さう。如何に此の内へ案内申し候ふ

山伏「*九しきの窓のまへ、十帖のとこのあたりに、ゆかの法水をたゝへ、三日の月を澄ます所に、案内

*九識の窓の前、十乘の床のほとりに、瑜伽の法水をたゝへ、三祇の月を澄ます所に、案内申さんとは如何なる者ぞ（謠曲英上、ワキの詞）

申さんといふは、ぞ。呂「私でございます。山伏「やあ、我御料は、何と思うて御出でやつたぞ。呂「唯今參りますは、別儀でもございませぬ。私の弟の太郎を御存じでございますか。山伏「中々ぞんじたが何としたぞ。呂「此の中、山へ柴を取りにやりましたれば、殊の外ぼうけまして、只うつかりとなりました。御大儀ながら御出でなされまして、御祈禱なされ下されますならば、忝なうございませう。山伏「夫は氣の毒な不憫な事ぢや。*此間は別行の仔細有つて、何方へも參らねども、其方が事ぢや、いてやらうまで。呂「夫は忝なう御座ります。かうございつて下されませ。山伏「なう〳〵、太郎は只うつかりとばかりして、物も云はねか。呂「左樣でござる。時々、鳥の鳴く樣な事ばかり申します。山伏「夫は不憫な事ぢや。呂「何かと申します中に、是でござる。まづ、かう御通りなされませ。山伏「心得た。何と太郎は何處もとにゐるぞ。呂「奥に居ります。連れて參りませう。山伏「連れておりやれ。呂「畏つて御座る。これでございます。山伏「それ、山伏と申すは、山に寢起するゆゑに、山伏と名づく。頭巾といつば、眞黑に染めたる布を、襞を折り頭に戴く故に、頭巾と申す。又此數珠は、むざとしたる數珠玉

*此間は別行の仔細あつて、何方へも聞り出でず候へども、大臣よりの御使と候程に、やがて參らうずるにて候（送上）



を繋ぎて、いらたかの數珠と名づく。斯程尊き山伏が一祈いのるものなれば、などか奇特のなからん。ぼろおん〳〵〳〵。いろはにほへと。ぼろおん〳〵。太郎「ほゝん。山伏「なう〳〵、今の聞きやつたか。何やら鳥の鳴く眞似をした。何と黑ひ當る事はないか。呂「されば。此の中、山へ參りました時、梟の巢落し致しましたと申しましたが、若し梟がつきましたか存じませぬ。山伏「それ、それ、今のは梟の鳴く聲。早氣遣しやるな。梟の嫌ふ鳥の印がある。之を結びかけ祈つてやろ。呂「夫は忝なうございます。山伏「如何に惡心なる梟なりとも、今一祈祈るなら、などか奇特のなからるべき。ぼろおん〳〵〳〵。橋の下の菖蒲は、ぼろおん〳〵、誰が植ゑた菖蒲ぞ、ぼろおん〳〵。太郎「ほゝん。呂「ほゝん。山伏「是は、如何な事、又兄にうつり居つた。扨も〳〵奇特な事かな、待て、おのれ。山伏「如何に、あなたへ移りこなたへ移る梟なりとも、明王のさつくにて祈るならなどか奇特のなかるべき。ぼろおん〳〵〳〵。ちりぬるをわか。ぼろおん〳〵〳〵。山伏「ほゝん〳〵。

# 隅田川

囃子方座に着きて後、作物（塚に柳をつけたるもの、内に子方入り居り）大小前に出す。ワキ舞臺に入り名宣る。

ワキ「是は武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又此在所にさる仔細有つて、大念佛を申す事の候ふ間、僧俗を嫌はず人數を集め候。其由皆々心得候へ。」

とて脇座に行く。次第となりてワキツレの男笠着て出て次第を謡ふ。

次第『末も東の旅衣、〳〵、日も遙々の心かな。

ワキツレ「かやうに候ふ者は、都の者にて候。我東に知る人の候ふ程に、彼者を尋ねて唯今まかり下り候。」

道行『雲霞、あと遠山に越えなして、〳〵、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名におふ隅田川、渡りに早く着きにけり。〳〵。

ワキツレ「急ぎ候ふ程に、是は早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出て候。急ぎ乘らばやと存じ候。如何に船頭殿、舟に乘らうずるにて候。」

ワキ「中々の事めされ候へ。先々御出て候ふ跡の、けしからず物騷に候ふは何事にて候ふぞ。」

ワキツレ「さん候都より女物狂の下り候ふが、是非もなく面白う狂ひ候ふを見候ふよ。」

ワキ「さやうに候はゞ、暫く舟をとゞめて、彼物狂を待たうずるにて候。」

二人脇座に行き下に居る。一聲にてシテ笠を被り、笹を肩にして出て、橋掛一の松にて

シテ『實にや人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひしら雪の、道行人に言づてゝ、行方を何と尋ぬらん。上歌『聞くや如何に、上の空なる風だにも、地『松に音する習あり。

カケリ

シテ『眞葛が原の露の世に、地『身を恨みてや明け暮れん。

シテ『是は都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に獨子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下り

シテ　梅若丸の母、面曲見又は深井、鬘、髱、鬘帶、箱附笛、鼓、笛、腰卷、腰帶、水衣、笠。

（一）人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（後撰、雜、藤原兼輔）

（二）聞くやいかに上の空なる風だにも松に音する習ありとは（新古今、戀、宮內卿）

（三）わが戀は松にしぐれの染めかねて眞葛が原に風騷ぐなり（新古今、戀、慈圓）

ぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。下歌地『千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌地『もとよりも、ちぎり假なる一つ世の、〳〵、其内をだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の、四鳥の別れ是なれや。尋ぬる心の果ならん、*武藏の國と、下總の中にある、隅田川にも着きにけり。〳〵。

大小前よりワキへ呼掛く

シテ「なう〳〵我をも舟に乘せて賜はり候へ。」

ワキ「お事は何くより何方へ下る人ぞ。」

シテ「是は都より人を尋ねて下る者にて候。」

ワキ「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずば此舟には乘せまじいぞとよ。」

シテ「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ、謠『かたの如くも都の者を、舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも、覺えぬ事を宣ひそよ。

ワキ「げに〳〵都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。」

シテ「なう其詞はこなたも耳に留まるものを、彼業平も此渡りにて、謠『名にしおはゞ、いざこと問はん都鳥、我思ふ人は有りやなしやと。

シテ「なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり、あれをば何と申し候ふぞ。」

ワキ「あれこそ沖の鷗候ふよ。」

シテ「うたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ、など此隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。」

ワキ『げに〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ『沖の鷗とゆふ波の、ワキ『昔にかへる業平も、シテ『有りや無しや

*（前略）猶行き〳〵て、武藏鄙と下總國とのなかにいと大きなる河あり、それを隅田河といふ。その河のほとりにむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかな、とわびあへるに、渡守「はや舟に乘れ、日も暮れなむ」といふに、乘りて渡らむとするに、皆人ものさびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鴨の大さなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと詠めりければ、舟こそりて泣きにけり（伊勢物語）

とこと問ひしも、ワキ『都の人を思妻、シテ『わらはも東に思子の、ゆくへを問ふは同じ心の、ワキ『妻を忍び、シテ『子を尋ぬるも、ワキ『思ひは同じ、シテ『戀路なれば、地『我も又、いざ事とはん都鳥、〳〵、我思子は東路に、有りやなし

やと問へども〳〵、答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥、とやいひてまし。實に

や舟ぎほふ、(一)堀江の川のみなぎはに、來居つゝ鳴くは都鳥、それは難波江これは又、隅田川の東まで、(二)思へば限りなく、遠くも來ぬる物かな。(三)さりとては渡守、舟こぞりて狹くとも、乘せさせ給へ渡守、さりとては乘せてたび給へ。ワキ「かゝるやさしき狂女こそ候はね、急いで舟に乘り候へ。此渡りは大事の渡りにて候。かまひて靜に召され候へ。」

シテ笠脱ぎ脇座に行き下に居ゑ、舟に乘る心。

(一) ふなきほふほりえのかはのみなきはにきねつゝたくはみやこどりかも（萬葉、廿、江邊）

(二) 船掛に行き正面遠に見て

(三) ツカ〳〵と舞臺に入り、ワキに向ひ、

男「なうあの向ひの柳の下に、人の多く集まりて候ふは何事にて候ふぞ。」

ワキ「さん候あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候、此舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。

さても去年三月十五日、しかも今日に相當つて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候ふが、此幼き者、いまだ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、此河岸にひれふし候ふを、なんぼう世には情なき者の候ふぞ、此幼き者をば其まゝ路次に捨てゝ、商人は奥へ下つて候。さる間此邊の人人、此幼き者の姿を見候ふに、よしありげに見え候ふ程に、さま〴〵に痛はりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、お事はいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しゝ人の唯ひとり子に

隅田川

て候ふが、父には後れ母ばかりに添ひ参らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影もなつかしう候へば、此道の邊りに築き籠めて、しるしに柳を植ゑて賜はれとおとなしやかに申し、念佛四五返稱へ遂に事終つて候。なんぼうあはれなる物語にて候ふぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候、逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。とうとう御上り候へ。」

男「如何さま今日は此所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。」

ワキ「如何に是なる狂女、何とて船よりは下りぬぞ急いで上り候へ。（初めてシテの泣き居る

に心附き）あらやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候ふよ。なう急いで舟より上り候へ。」

シテ「なう舟人、今の物語はいつの事にて候ふぞ。」

ワキ「去年三月今日の事にて候。」

シテ「さて其兒の年は。」

ワキ「十二歳。」

シテ「主の名は。」

ワキ「梅若丸。」

シテ「父の名字は。」

ワキ「吉田の何某。」

シテ「さて其後は親とても尋ねず、」

ワキ「親類とても尋ねこず、」

シテ「まして母とても尋ねぬよなう。」

ワキ「思ひもよらぬ事。」

シテ『なう親類とても、親とても、尋ねぬこそ理なれ。其幼き者こそ、此物狂が尋ぬる子にては候へとよ、なう是は夢かやあらあさましや候。

ワキ「言語道斷の事にて候ふ物かな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや、あら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候ふべし、こなたへ御出て候へ。」

ワキ先きに、ワキツレ、シテ立ち、作物の右の方に行く。シテ作物をとくと見て

シテ『今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慙や死の縁として、生所を去つて東のはての、道の邊りの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此下にこそあるらめや。下歌地『さりとては人々此土を、かへして今一度、此世の姿を、母に見せさせ給へや。上地歌『殘りても、かひあるべきは空しくて、〳〵、あるはかひなきはゝきぎの、見えつ隱れつ面影の、定めなき世の習ひ、人間うれひの花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲おほへり、實に目の前の憂き世かな。〳〵。

※袖涙別鄉思、飄颻將遐行、茫茫曠野中、春盡孤客情、駟馬上丘隴、高低路不平、風吹棠梨花、啼鳥時一聲、古墓何代人、不知姓與名、化作路傍土、年々春草生、感彼忽自悟、今我何晢晢。（白氏文集、卷二、諷喻）

※平座、兩手にてシオル、

ワキ「今は何と御歎き候ひてもかひなき事、たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御とぶらひ候へ。謠『既に月出て河風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勸むれば、シテ『母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふして泣き居たり。

ワキ「うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれと謠『鉦鼓を母に參らすれば。

シテ『我子の爲と聞けばげに、此身も鳧鐘を取り上げて、ワキ『歎きをとどめ聲澄むや、シテ『月の夜念佛もろともに、ワキ『心は西へと一すぢに、シテ二人『南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛、地『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ『隅田河原の波風も、聲立て添へて、地『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ『名にしおはば都鳥も音を添へて、地、子方『南無阿彌陀佛、

シテ「なう〳〵今の念佛の內に、正しく我子の聲の聞え候。此塚の內にて

※ワキ謠ひつゝ、シテに鉦と鐘木とを渡すシテ立ちて

ありげに候ふよ。」

ワキ「我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候ふべし、母御一人御申し候へ。」シテ『今一聲こそ聞かまほしけれ、南無阿彌陀佛。子『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、地『聲の内より、(一)幻に見えければ、シテ『あれは我子か、子『母にてましますかと、地『(二)互に手に手を取りかはせば、(三)又消え消えとなり行けば、いよ〳〵思ひはます鏡、面影も幻も、(四)見えつ(五)隱れつする程に、東雲の空もほの〴〵と、明け行けば跡絶えて、我子と見えしは塚の上の草茫々として唯、しるしばかりの淺茅が原と、なるこそあはれなりけれ。〳〵。

見廻し正面白きシオリ留め。

子方　梅若丸面、黑頭、著附袴、白水衣、腰帶。

(一)子方作物より出でて臨座に立つ

(二)シテ鏡木鉦捨て兩手ひろげて

(三)子方作物に入る

(四)子方再びはでで常座前に立つ

(五)作物に入る

# 瓜盜人

瓜主詞白「罷出たる者は此邊の耕作人でござる。常年は瓜を作つてござるが、身共が仕合で殊の外好う出來てござる。今日は畑へ見舞うて、臍落の致したを、ちと取つて參らうと存ずる。誠に此邊方々に瓜を作つたれども、某がやうなはござらぬ。畑へは毎日見舞はねばならぬ。是が身共が畑ぢや。やれ〳〵嬉しや、夥しう生つた。思ひ出した、何時も畑へ獸がついて瓜を荒す、人形を作り置かう。(人形を作る)一段好い。明日見舞うて臍落ちを取らう。(太鼓座へ入る)

盜人詞白「これは此邊に住居致す者でござる。今日用所ござつて、山一つ彼方へ參つてござるが、道に見事な瓜が生つてあつた。私にお目をかけらるゝお方に、瓜好な人がござる程に、今夜あれへ參つて、四つ五つ取つて參らうと存ずる。

方々に瓜畠が數多ござれども、今日見て置いたやうな瓜はござらぬ。此邊にあつたが、どの畠ぢや知らぬ。これぢや。先垣杭を抜かう。(垣を二三本抜く態をして、腰かゞめて畠へはいる。)さア畠へは這入つたが、番の者は無いか知らぬ。あらば聲を立うが無い物ぢや。晝見たれば瓜がいかい事見えたが、夜ぢやに依つて見えぬ。これが瓜さうな。瓜かと思ふたれば枯葉ぢや。(彼處此處を搜して見て)瓜にあたらぬ。此樣な事では瓜を取ることはなるまい。何とした物であらう。思ひ出した。夜瓜を取るには轉びをうつて取るものぢやと聞いた、さらばこれから轉びをうつて

見よう。さればこそ、枕のやうにあたつた。（枕の時寐て居てわらふ。一つ潰れたわと云ふ。）扨も〳〵好い匂ひや。此處にあるわ。後の方にもあたつた。此樣にして取らば、如何程なりとも取れう。（此處にて脇座の方に案山子あり。其側へ軈びかゝる。人形を見て肝を潰す。）眞平御許されませ。私は盗人ではござりませぬ。こなたの畠が餘り見事に瓜が生りましたと承はりまして、見物に參りました。命の儀を御許されませ。瓜二つ三つ取りましてござる、皆返しませう。御免なつて下されませ。申し。物を仰せられねば何共迷惑でござる。重ねては最早參りますまい程に、中に御許させられて、かへさせられて下されませや。申し。なう。（手をあげて。暗き時物を見る態して、人形を見付て）是は如何な事、うしにくらはれ。さても〳〵よい肝を潰いた。瓜主かと思うて、いくせの事を思ひ、迷惑した。此樣にようも〳〵、上手が作つた物ぢや。其儘人のやうな。獣が見たらば肝を潰いて、あたりへは寄るまい、此奴故思ひも寄らぬ肝を潰いた。重ねて來ることではなし、打こかいてのけう。（打倒して）腹の立つことぢや。瓜蔓も引拐つてのけう。好い仕合せ、急いで戻らう。（太鼓の側へ入る）

瓜主詞白　昨日瓜畠へ參つた、未臍落が致さなんだ。今日は大方臍落がござらう、取つて參らう。内の者を遣れば瓜を盗みおるに依つて、某の毎日參らねばならぬ。これは如何な事。散々に畠を荒いておいた。是は扨、瓜蔓も引拐つておきをつた。其上人形も打倒いておきをつた。これはいかさま獣の業ではない、瓜盗人め。ゆうべうせたものであらう。扨も〳〵腹の立つ事ぢや。こよひは某がかゞせになつて捕へう。定めてゆうべので味を得て、又今夜も取りに參らぬことはあるまい。（右の人形の樣に烏帽子を着、面を被り、左に綱、右に竹の杖、床几に腰をかけ居る。）

盗人詞白「よそへ物を遣ろとも、後前の分別して遣る事ぢや。盗んだ瓜を、さるお目をかけらるゝ方へ進上致したれば、扨も好い瓜ぢや、これは其方が手作かと仰せられたに依つて、中々、私の手作でござると申したれば、扨も好い瓜ぢや、近頃無心なれども、客がある程に、瓜をま四つ五つくれいと仰せらるゝ。何とも返事の致しやうがなうて、畏つてござると申した。某の手作でござると申したに依つて、今更なりますまいとも申されぬ。是非に及ばぬ。今夜彼へ行て、瓜を取つて參らうと存ずる。

此樣に又參らうとは思らいで、瓜畠を散々に荒して置いた。瓜主が見舞はぬことはあるまい、見舞ふたらば腹を立て、今夜は番をして居ることもあらう。何とやら胸騒がして氣遣な。此畠ぢや。いやゆうべ垣を破つて置いたが其儘ある。定めて瓜主が見舞はなんだらのであらう。見舞ふたらば此樣にしてはおくまい。さればこそ。拐つておいた瓜蔓が其儘である。嬉い事ぢや。（そろ〳〵人形の側へ寄り、見付て大いに肝潰す。）是は如何な事。不思議な事ぢや。ゆうべ人形を打倒いて置いたが、又立てておいた。是は瓜主が見舞はぬではない。合點がいかぬ。はあ、合點した。定めて内の者の業であらう。主が畠を見舞うて來いと吩咐けたに依つて、見舞はしたれども、人形ばかり立てゝおいて、垣も其儘で戻つたものぢやらう。總じて下々は、どれも此樣な事ぢ

や。殊に此案山子は、ゆうべよりは猶好う人に似た。（こゝにて仕樣あり。下に居て、うそふきの面へ指さしなどして笑うて）其儘人ぢや。某をきつと見て居る。いや思ひ出した。いつも盆になれば、若い衆が踊をせらるゝ。當年は中踊に鬼が責める處をせうと云はれた。幸の事、此人形をば罪人にして、某が鬼になつて、責めて見よう。わい〳〵、好い杖もある。急いで責めて見よう。謡如何に罪人、地獄遠きにあらず。極樂遙なり。急けとこそ。（カケリ責めて）先鬼の責はこれが好からう。人形ぢやに依つて、責力が無い。さりながら、これも圖であらう。某が罪人に取當ることもあらう。此人形を鬼にして、身共が罪人になつて責られて見よう。幸ひ好き引綱がある。あら悲しや、これ程參り候に、さのみな御責候ひそ。謡「行けど行かれぬ死出の山。行かんとすれば引止む。止れんば杖でてうと打つ。（瓜主杖にて頭を打つ）これは如何な事、何者やら飛礫をうつた。あたりに人は無い〳〵、不思議な事ぢや。何者がうつたぞ知らぬ。合點が行かぬ。今此綱を引いて肩にかけたればうつたが、（何度も綱を引きゆゑめ、其度に杖の上下するを見て大笑）はあ。扨も扨も、好う拵へた物ぢや。此綱を引けば上る、下ると下る、ばつたり〳〵〳〵。扨も扨も、をかしいことかな。百姓は賢いものぢや。これなれば氣遣ない。さらばも一度責められて見よう。謡「行けど行かれぬ死出の山、行かんとすれば引止む。止まれんば。（杖にてでうと打つ。）瓜主（面とり）「かつきめ。やるまいぞ〳〵。盜人、あら悲しや。許させられ〳〵。

# 山姥

次第にてツレ、ワキ、ワキツレ（二人）出で、舞臺に入り向き合ひ次第を謡ふ。

ワキ次第『善き光ぞと影たのむ、〳〵、佛の御寺尋ねん。

ワキ「是は都方に住ひ仕る者にて候。又是に渡り候ふ御事は、百魔山姥とて隱なき遊女にて御座候。かやうに御名を申すいはれは、山姥の山廻りするといふ事を、曲舞に作つて御謡ひあるにより、京童部の申しならはして候。又此頃は善光寺へ御參りありたき由承り候ふ程に、某御供申し、唯今信濃國善光寺へと急ぎ候。」

サシ謡『都を出でて小波や、志賀の浦船漕がれ行く、末は有乳の山越えて、袖に露散る玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそ遙なれ。

上歌『梢波立つ汐越の、〳〵、安宅の松の夕煙、消えぬ憂き身の罪を切る、彌陀の劒の砥並山、雲路うながす三越路の、國の末なる里問へば、いとど都は遠ざかる、境川にも着きにけり。〳〵。

ワキ、從者、素袍上下。ワキツレ、ワキと同斷。ツレ、都の女、面小面、髮、髻帽、箒附箒、唐織着流、扇。

ワキ「御急ぎ候ふほどに、是ははや越後越中の境川に御着きにて候。暫く是に御座候ひて、猶々道の樣體をも御尋ねあらうずるにて候。」

ワキ、橋掛の方に向ひ、「境川の人の渡り候か」とて、狂言座にひかへたゝ狂言方を呼び出す。狂言立ちて、「境川の者と御尋は何の御用にて候ぞ。」ワキ善光寺への道を問ふ。狂言、「是より善光寺への道あまた御座候中にも、上道下道あげろ越と申して御座候が、此あげろ越は、如來の踏み分け給ひたる道にて候により、己身の彌陀唯心の淨土にたとへられ、此道を御參り候へば、如來の御内證に御かなひなさるゝ道にて候。さりながらさかしき道にて候程に、乘物などは中中かなはぬ道にて候」といふ。ワキ此通りなツレに申す。

ツレ「げにや常に承る、西方の淨土は十萬億土とかや、是は又彌陀來迎の直路なれば、あげろの山とやらんに參り候ふべし。謠『とても修行の旅なれば、乘物をば是にとゞめ置き、徒はだしにて參り候ふべし、道しるべして給び候へ。」

ワキ改めて狂言に向ひ、道案内を頼む、狂言承知し「さらば御立ち候へ」とて、ツレワキ皆立ち山越えの心。狂言とワキ、最前の話の如く險難なる道なる旨を話し合ひ、暫く歩行したる樣體にて、狂言、空を見て、「何とやら日の暮るゝやうな」と獨言し、ワキに向ひ、「未だ日の暮るゝ時分にては御座ないが、俄に暗うなりて候」といふ。

ワキ「あら不思議や、暮るまじき日にて候ふが俄に暮れて候ふよ。さて何と仕り候ふべき。

狂言「とかう申すうちに、前後を辨へず候よ。苦々しい事かな」といふ、其時幕上げてシテ、呼びかけつゝ出づ。

シテ「なう〳〵旅人御宿參らせうなう。是はあげろの山とて人里遠き所なり。日の暮れて候へば、わらはが庵にて一夜を明させ給ひ候へ。」

ワキ「あらうれしや候。俄に日の暮れ前後を忘じて候、やがて參らうずるにて候。」

狂言は狂言座にツレは脇座に、ワキ、ワキツレは其次々に、シテ眞中に坐す（庵に入りたる心）。

シテ「今宵の御宿參らする事、とりわき思ふ子細あり。山姥の歌の一節うたひて聞かさせ給へ、年月の望なり鄙の思出と思ふべし。謠『其ために こそ日を暮らし、御宿をも參らせて候へ。いかさまにも謠はせ給ひ候へ。

ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。さて誰と見申されて、山姥の歌の一節とは御所望候ふぞ。」

シテ　山に住む女、面深井又曲見、鬘、髻帽、著附箔、色無唐織著流。

シテ「いや何をか包み給ふらん。あれにまします御事は、百魔山姥とてかくれなき遊女にてはましまさずや。まづ此歌の次第とやらんに、謠『よし足引の山姥が、山めぐりすると作られたり。あら面白や候。

シテ「是は曲舞に依りての異名。さて誠の山姥をば、如何なる物とか知ろしめされて候ふぞ。」

ワキ「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候。」

シテ「鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女ならば、妾が身の上にてはさぶらはずや。年頃色には出ださせ給ふ、言の葉草の露ほども、御心には掛け給はぬ、恨み申しに來りたり。謠『道を極め名を立てゝ、世情萬德の妙花を開く事、此一曲の故ならずや。然らば妾が身をも弔ひ、舞歌音樂の妙音の、聲佛事をもなし給はば、などか妾も輪廻をのがれ、歸性の善所に至らざらんと、恨みをゆふ山の、鳥獸も鳴きそへて、聲をあげろの山姥が、靈鬼是まで來りたり。

ツレ『不思議の事を聞く物かな、さては誠の山姥の、是まで來り給へるか。

シテ「我國々の山廻り、今日しもこゝに來る事は、我名の德を聞かん爲なり、謠ひ給ひてさりとては、我妄執を晴らし給へ。」

ツレ『此上はとかく辭しなば恐ろしや、もし身のためやあしかりなんと、はばかりながら時の調子を、取るや拍子をすゝむれば、

シテ「しばさせ給へとてもさらば暮るゝを待ちて月の夜聲に、謠ひ給はば我も又、誠の姿をあらはすべし。謠『すはやかげろふ夕月の、さなきだに、暮るゝを急ぐ深山邊の、地『暮るゝを急ぐ深山邊の、雲に心をかけ添へて、此山姥が一節を、夜すがら謠ひ給はば、其時わが姿をも、あらはし衣の袖つぎて、移舞をまふべしと、いふかと見れば其まゝ、かき消すやうに失せにけり。〳〵。

シテ靜に幕に入り、中入。狂言、狂言座より立ちて又明るくなつたよしをいひてワキの前に出で坐し、山姥には鴨瓜がなる、藤こぶがなるなど、所の言ひ傳へを面白く述べ、唯今の女は、山姥の歌の一ふしを歌ひたまはば、誠の姿を現はして移舞を舞はうと申した程に、「一ふし御所望候へ。我等此所にて姿を見まゐらせうずるにて候。」とて狂言座にくつろぐ。ツレ待謠

ツレ『あまりの事のふしぎさに、さらに誠と思ほえぬ、鬼女が詞を違へじ

と、上歌謠『松風ともに吹く笛の、〳〵、聲すみわたる谷川に、手まづさへぎる曲水の、月に聲すむ深山かな。〳〵。

一聲にて後シテ、木の葉をつけたる鹿背杖をつき出て、松掛一の松にて正面向き

シテ『あら物凄の深谷やな、〳〵、(一)寒林に骨を打つ靈鬼、泣く泣く前生の業を恨む。深野に花を供ずる天人、かへす〴〵も幾生の善をよろこぶ。いや善惡不二、何をか恨み何をか喜ばんや、萬箇目前の境界、懸河渺々として、巖峨々たり、(二)山又山、いづれの工か青巖の形を削りなせる、水また水、誰が家にか碧潭の色を染め出だせる。

しづ〳〵舞臺に入る、ツレ之を見て

ツレ『恐ろしや月も木深き山陰より、其さま化したる顏ばせは、其山姥にてましますか。

シテ「とてもはや穗に出でそめし言の葉の氣色にも知ろしめさるべし、我にな恐れ給ひそとよ。」

ツレ『此上は恐ろしながらうば玉の、闇まぎれよりあらはれ出づる、姿詞

後シテ　鬼女(山姥)面山姥、姥髮(又は白頭)鬘帽、着附箔、半切、唐織遊折、腰帶扇。

(一)溫野に骨を剛せし天人は平生の善を喜び寒林に屍を打ちし惡鬼は前世の惡を悲む(平治物語、信頼最後事)

(二)山復山、何工削成青巖之形、水復水、誰家染出碧潭之色。(朗詠集、雜、山水策、大江澄明)



は人なれども、

シテ「髮にはおどろの雪を戴き。」

ツレ『眼の光は星の如し。

シテ『さて面の色は、ツレ『さにぬりの、シテ『軒の瓦の鬼の形を、ツレ『今宵始めて見る事を、シテ『何にたとへん、ツレ『古への、上歌地『(一)鬼一口の雨の夜に、〳〵、雷なりさわぎ恐ろしき、其夜を思ひ白玉か、何ぞと問ひし人までも、我身の上になりぬべき、浮世がたりも恥かしや。〳〵。

シテ「春の夜の一時を千金に換へじとは、(二)花に清香月に陰、是は願ひのたまさかに、行き逢ふ人の一曲の、其ほどもあたら夜に、はや〳〵謠ひ給ふべし。

ツレ『げに此上はともかくも、いふに及ばぬ山中に、

(一)上略　芥川といふ河をいきければ、草の上におきたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆくさきおほく夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたうふりければあばらなる廚に、女をば奥におし入れて男は弓胡籙を負ひて戸口に居り。はや夜も明けなむと思ひつつ居たりけるに、鬼はや一口にくひてけり。「あたや」といひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やう〳〵夜も明けゆくに、見ればゐて來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。白玉かなにぞと人のとひしとき露と答へてきえなましものを　(伊勢物語)

(二)春宵一刻直千金(蘇東坡の詩、一七頁參照)

シテ「一聲の山鳥羽をたゝく。」

ツレ『鼓は瀧波、シテ『袖は白妙、ツレ『雪をめぐらす木の花の、シテ『(一)なにはの事か、ツレ『法ならぬ、上歌地『よし足引の山姥が、〳〵、山廻りするぞ苦しき。

シテ後見座に行き杖を渡し、扇持ちて出で次の一句を歌ひ中央に行き床几。

シテ『夫れ山と謂つぱ、塵泥より起つて、天雲かゝる千丈の峯、地『海は苔の露よりしただりて、波濤を疊む萬水たり。シテ『一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、地『無聲音を聞くたよりとなり、聲にひびかぬ谷もがなと、望みしもげにかくやらん。シテ『ことに我住む山家の景色、山高うして海近く、谷深うして水遠し。地『(二)前には海水瀁々として、月眞如の光をかゝげ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る。シテ『刑鞭蒲朽ちて螢むなしく去る、地『諫鼓苔深うして、鳥驚かずともいひつべし。

クセ『(三)遠近の、たづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の、聲すごき折々に、(四)伐木丁々として、山さらに幽なり。法性峯そびえては、上求菩提をあらはし、無明谷深きよそほひは、下化衆生を表して、金輪際に及べり。

(一)津の國の難波のことか法ならぬ遊び戯れまでとこそきけ　謠曲に書寫のひじり結緣經供養しはべりけるに人々あまたふせをおくりけるなかにおもふこゝろやありけむしばしとらざりければよめる。（後拾遺、雜戀、遊女宮木）

(二)上略　前には海水瀁々として、月眞如の光を浮べ、後には巍松巍巍として、風常樂の響を奏す。雲東天にはれ、波西海に靜なり。まことに三修栄迎の儀式もたよりあり、九品往生の望たりぬべし。けいべんがまくちて響むなしく去る。諫鼓苔深うして鳥驚かずとぞかゝれける。（長門本平家物語卷六、成親鄕の有木別所の條子に書きおかれたる文句）

(三)荊鞭蒲朽螢空去　諫鼓苔深鳥不驚（朗詠集、雜、無常　治詩、大江音人）

(四)遥近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな（古今、春、讀人不知）

(四)春山無伴獨相求　伐木丁丁山更幽　澗道無蹤氷雪石門斜日到林丘　不貪夜識金銀氣　遠塞朝看麋鹿遊　乘興者然迷出處　對君疑是泛虛舟（唐詩選、七言律詩、題張氏隱居。杜甫）

（移舞の心）

これより立ちて舞ふ。

そも〳〵山姥は、生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便りにて、至らぬ山の奥もなし。シテ『然れば人間にあらずとて、地『隔つる雲の身をかへ、假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色卽是空其まゝに、佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。柳は綠花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事、ある時は山賤の、樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷の肩を貸し、月もろともに山を出て、里まで送るをりもあり。又ある時は織姫の、(一)五百機立つる窓に入つて、枝の鶯絲くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、(二)賤の目に見えぬ、鬼とや人のいふらん。

シテ『世を空蟬の唐衣、地『拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、打ちすさぶ人の絶間にも、(三)千聲萬聲の、砧の聲のしてうつは、ただ山姥がわざなれや。都に歸りて、世語にせさせ給へと、思ふは猶も妄執か、唯うち捨

(一)綿機の五百機立てて織る布の秋去り衣たれかとり見む（萬葉、十、秋雜歌）

(二)上略　力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは

てよ何事も、よしあし引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。

シテ『あしびきの、地『山めぐり、

扇を納め杖持ちてカケリ。以下キリの形種々あり。

シテ『一樹の陰一河の流れ、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや我名を夕月の、浮世をめぐる一節も、狂言綺語の道すぐに、讃佛乘の因ぞかし。あら御名殘惜しや、いとま申して歸る山の、地『春は梢に咲くかと待ちし、シテ『花を尋ねて山めぐり、地『秋はさやけき影を尋ねて、シテ『月見る方にと山めぐり、地『冬はさえ行く時雨の雲の、シテ『雪をさそひて山めぐり、地『めぐりめぐりて、輪廻を離れぬ妄執の雲の、塵つもつて山姥となれる、鬼女が有樣みるや〳〵と、峯にかけり谷に響きて、今迄こゝにあるよと見えしが山又山に山廻り、山又山に山廻りして、行方も知らずなりにけり。

仕手柱にて小廻り拍子踏みて留め。

歌なり（後略）（古今序）

（三）八月九月正長夜千聲萬聲無止時（白氏文集、四三頁出）

※顯以今生世俗文字之美、狂言綺語之誤。翻爲當來世々讃佛乘之因、（白氏文集、卷十一、香山寺白氏洛中集記。）（和漢朗詠集、雜佛事にも出づ）

# 謠曲狂言

終



大正十年十二月六日印刷
大正十年十二月十日發行

謠曲狂言

著作權所有

定價金壹圓貳拾錢

著者　平林治德
東京市神田區表神保町二番地

發行者　矢島一三
東京市神田區表神保町二番地

印刷者　矢島源三郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

發行所　中興館
東京市神田區表神保町二番地
電話神田三二一二
振替東京四一二

エトU43


□高等國文教科書□

第一高等學校教授　島津久基先生編

**源氏物語**

新型菊判上製美本
上中下全三冊
定價各金一圓五十錢

女子學習院教授　平林治德先生編

**謠曲狂言**

新型菊判上製美本
全一冊
定價金一圓二十錢

女子學習院講師　久松潛一先生編

**大鏡**

新型菊判上製美本
全一冊
定價金一圓十錢

女子學習院講師　久松潛一先生編

**增鏡**

新型菊判上製
全一冊
定價

此の外に枕草紙・落窪物語・平家物語・淨瑠璃選・歌選・徒然草など引續き刊行いたします。

發行所　東京市麹町區表一番町二番地　東京市神田區表一番町三番地　中興館

終